

序

南国市は物部川と国分川に育まれた肥沃な香長平野に抱かれ、「土佐のまほろば」といわれるように古くから人が生活を営むのに大変適した場所で、数多くの遺跡が所在します。代表的なものとして、旧石器時代の奥谷南遺跡に始まり、弥生時代の田村遺跡群、紀貫之の土佐日記にも記される土佐国衙跡、中世守護代細川氏の居館である田村城跡、長宗我部氏の居城である岡豊城跡などがあります。

そのなかで、前浜境遺跡は令和元年度の試掘発掘調査の成果から新たに発見された遺跡であり、古代から近世にいたる人々の営みの一端を知る資料を得ることができました。

本書は令和3年度に行われた高知南国農地整備事業に伴う前浜境遺跡発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査結果が今後広く利用され、文化財保護及び学術研究の一助になれば幸いです。

調査にあたりご指導を賜りました高知県教育委員会、(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、また、発掘調査への深いご理解とご協力をいただいた周辺地区の方々、そして発掘・整理作業にご尽力いただいた作業員の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

令和5年11月

南国市教育委員会
教育長 竹内 信人

例 言

1. 本書は、令和3年度に南国市教育委員会が中国四国農政局高知南国農地整備事業所からの委託を受けて実施した高知南国農地整備事業に伴う前浜境遺跡発掘調査の報告書である。
2. 前浜境遺跡は、高知県南国市下島字前浜境に所在する。
3. 調査期間は以下のとおりである。
試掘確認調査：令和元年10月9日～10月23日
発掘調査：令和3年10月1日～10月29日
4. 発掘調査は、南国市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。令和3年度の調査体制は以下のとおりである。
調査員 油利崇 (南国市教育委員会 生涯学習課 文化財係 主幹)
田上修造 (南国市教育委員会 生涯学習課 文化財係 主事)
5. 本書の執筆・編集は田上が行った。
6. 調査トレンチ、調査区番号については適宜設定した。遺構については、掘立柱建物跡 (SB)、土坑 (SK)、溝 (SD)、ピット (P) で表示した。
本書の標高は海拔高であり、方位は座標北を用いた。
7. 現場作業・整理作業においては、高知県教育委員会文化財課、(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター諸氏のご指導・ご教授を得た。記して深く謝意を表したい。
8. 発掘調査にあたっては、地元住民の方々のご理解・ご協力を得た。また、以下の現場作業員、整理作業員の方々のご協力を得た。記して深く謝意を表したい。
(敬称略、50音順)
〔調査補助員〕 森岡和信
〔現場作業員〕 植田秀夫、大石幸雄、大和田延子、川村正廣、久家瑞、窪田泰詔、比山隆雄
〔重機オペレーター〕 門田佳久
〔整理作業員〕 松木富子、山中美代子
9. 当調査の出土遺物は南国市教育委員会が保管している。遺跡の略号は21MSである。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査の方法	
1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の概要	1
3. 調査の方法	2
4. 試掘確認調査	2
第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の成果	
1. 調査の概要と基本層序	10
2. 検出遺構と出土遺物	
(1) 掘立柱建物跡	15
(2) 土坑	15
(3) 溝状遺構	19
(4) その他の遺構	22
第Ⅳ章 自然科学分析	
前浜境遺跡土壌サンプルの自然科学分析	26
第Ⅴ章 総括	
1. 遺構	34
2. 遺物	35
3. まとめ	35

挿 図 目 次

図 1	南国市位置図	1
図 2	調査区配置図	3
図 3	試掘確認調査トレンチ配置および遺跡位置図	4
図 4	前浜境遺跡周辺の遺跡	7
図 5	1区～3区遺構配置図	11
図 6	4区・5区遺構配置図	12
図 7	1区～3区調査区土層図	13
図 8	4区・5区調査区土層図	14
図 9	SB1 遺構図	15
図 10	SK6・11・12・13・15・16, SD10 遺構図	16
図 11	SK17～21 遺構図	18
図 12	SD2～4 遺構図	20
図 13	SD7・14, 段状遺構 1, ピット列遺構図	21
図 14	SK11・16 出土遺物実測図	22
図 15	SK17 出土遺物実測図	23
図 16	SK18, SD3・4・10 出土遺物実測図	24
図 17	遺構外出土遺物実測図	25
図 18	暦年較正結果	28
図 19	植物珪酸体・炭化材の顕微鏡写真	32
図 20	炭化種実写真	33

表 目 次

表 1	放射性炭素年代測定結果	28
表 2	植物珪酸体分析結果	29
表 3	種実分析結果	29
表 4	出土遺物観察表	36

写真図版目次

- | | | | |
|-------|---|-------|---------|
| 図版 1 | 調査地遠景（南東から）
調査地遠景（北西から） | 図版 11 | 出土遺物（1） |
| 図版 2 | 遺構完掘状況オルソ画像（上空から） | 図版 12 | 出土遺物（2） |
| 図版 3 | 1区完掘状況（南東から）
2区完掘状況（南から） | 図版 13 | 出土遺物（3） |
| 図版 4 | 2区東壁土層堆積状況（南西から）
3区完掘状況（南東から） | 図版 14 | 出土遺物（4） |
| 図版 5 | 4区南部検出状況（南から）
4区南部完掘状況（南から） | 図版 15 | 出土遺物（5） |
| 図版 6 | 4区北部検出状況（北西から）
4区北部完掘状況（北西から） | | |
| 図版 7 | 5区完掘状況（南から）
3区SB1完掘状況（北西から） | | |
| 図版 8 | 3区SK6土層堆積状況（南から）
3区SK6完掘状況（北から）
4区SD10・SK12土層堆積状況（南から）
4区SK13完掘状況（北東から）
4区SK15完掘状況（西から）
4区SK16完掘状況（東から）
5区SK19完掘状況（東から）
5区SK20完掘状況（東から） | | |
| 図版 9 | 4区SK17・18完掘状況（北東から）
5区SK21土層堆積状況（南から）
5区SK21完掘状況（東から）
3区SD2完掘状況（東から）
3区SD4完掘状況（北東から） | | |
| 図版 10 | 4区SD10・SK11土層堆積状況（東から）
4区SD14完掘状況（東から）
2区段状遺構1土層堆積状況（西から）
2区段状遺構1完掘状況（東から）
2区段状遺構1焼土面検出状況（東から）
2区段状遺構2完掘状況（西から）
2区P7～12土層堆積状況（南東から）
2区P7～12完掘状況（東から） | | |

第 I 章 調査に至る経過と調査の方法

1. 調査に至る経過

周知の埋蔵文化財包蔵地「前浜境遺跡」は南国市下島に位置する古代から中世にかけての遺物散布地である。

高知南国農地整備事業に先立ち、南国市教育委員会が工事計画地の遺構・遺物の有無を確認し、遺跡の保護と開発事業との調整を図ることを目的として令和元年度に下島工区の試掘確認調査を行った。調査の結果、古代～中世の遺構・遺物の広がり確認されたため、高知県教育委員会と協議し、当該地を前浜境遺跡として新設した。工事内容について事業者と協議を行った結果、遺跡が影響を受ける範囲について記録保存の発掘調査を実施することとなった。本調査は事業者からの委託を受けて南国市教育委員会が調査主体となり、令和3年10月1日から10月29日に実施した。

2. 遺跡の概要

前浜境遺跡の所在する下島地区は東側に一級河川である物部川が流れ、南側には太平洋土佐湾を臨む地域である。物部川から流れた土石から形成される浜堤は東西に広がり、幅は約500m、標高は凡そ11mにもなり、浜堤上は住宅地として利用されている。本調査地である下島地区は大部分が太平洋戦争期に高知海軍航空隊の空港用地として接収されたため、空港周辺は当時の区画を利用した耕作地が広がる。当遺跡以外には遺跡

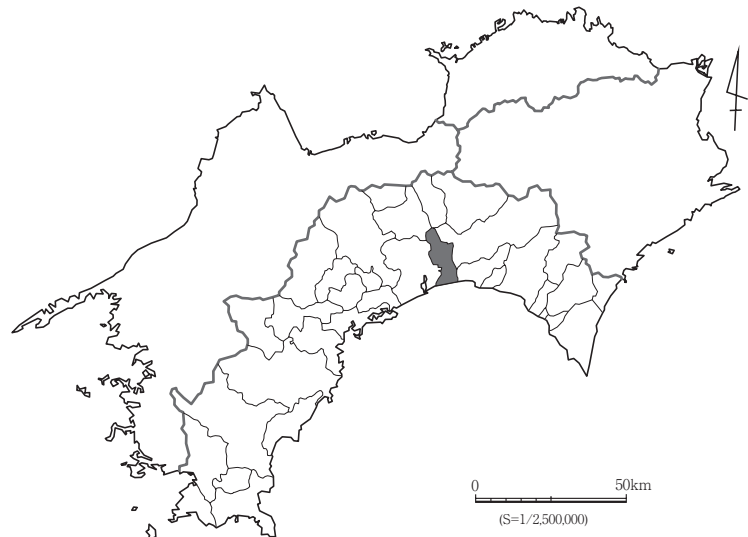


図1 南国市位置図

が希薄な地域ではあるが、北部には県内最大規模の弥生集落地として知られる「田村遺跡群」や中世守護代所である「田村城跡」が存在する。西部には戦争遺跡である南国市史跡「前浜掩体群」があり、掩体が精良な状態で7基残存しており、平和学習で生きた資料として活用されている。

今回調査した前浜境遺跡は試掘確認調査により古代～中世にかけての遺構・遺物が確認された遺跡である。旧物部川の自然堤防上に位置しており、現在は東側に秋田川が隣接している。試掘確認調査では事業対象地の南部にあたる TP8 から土師器や須恵器、底部の切り離しが回転糸切の土師質土器などが出土した。今回の調査地は試掘結果から遺跡の広がり確認できた TP8 の西南部に位置する。

3. 調査の方法 (図 2)

調査にあたっては、世界測地系公共座標第Ⅳ系に基づく基準点を設置し、遺構図面を作成した。

調査の必要な範囲は南北方向に設置される水路工事の予定地 (1・2・4・5区) と、その東側で三角形には場の面的な掘削がおよぶ範囲 (3区) がある。調査区は筆毎に北から順に1区～5区と設定し、順次調査を行った結果、全部で320㎡の調査となった。

4. 試掘確認調査 (図 3)

今回の発掘調査では、事前に令和元年10月9日～23日に試掘確認調査を行い、遺跡の存在する範囲、深さ等を確認した。その結果をもとに、工事により影響を受ける範囲を算出し、本調査の対象地を決定した。

試掘確認調査では、対象地全域に3m×3mの調査トレンチを任意に11ヶ所設定した (TP1～TP11)。

TP1～7・9～11からは遺構は確認できず、遺物もほとんど含まれていなかった。

TP8は1層耕作土、2層暗灰黄色シルト、3層灰黄褐色シルト、4層灰色シルトである。3層上面でピット2基を検出した。P1は直径約58cm、深さ24cmで埋土は炭化物の混ざる灰黄褐色シルトである。遺物は土器片が20点程出土しており、その内の1点は底部切り離しが回転糸切りの土師質土器杯である。P2は直径約30cm、深さ38cm、埋土は灰オリーブシルトである。遺物は土器細片1点が出土した。下層確認のため掘削を行ったが、表土から60cm程度下からP3を検出した。ただしこれは上面にあった攪乱に切られ、ピットの底部のみが残っていた状況である可能性が考えられる。P3の直径は23～26cm、埋土は黄灰色シルトである。遺物は土器細片が1点出土した。

これらの調査結果から、下島地区の北部および西部は僅かな遺物が混ざる層があるものの、遺構の広がりを確認することはできなかった。一方で南西部に位置するTP8からはピット3基と遺物を検出した。遺構・遺物は多くないが包含層やピットから土器片などが出土していることから古代～中世の遺構がTP8より南に広がることが判明した。そのため当該位置を包蔵地として新設した上で、掘削により遺跡に影響がある工事範囲については本調査が必要と判断した。

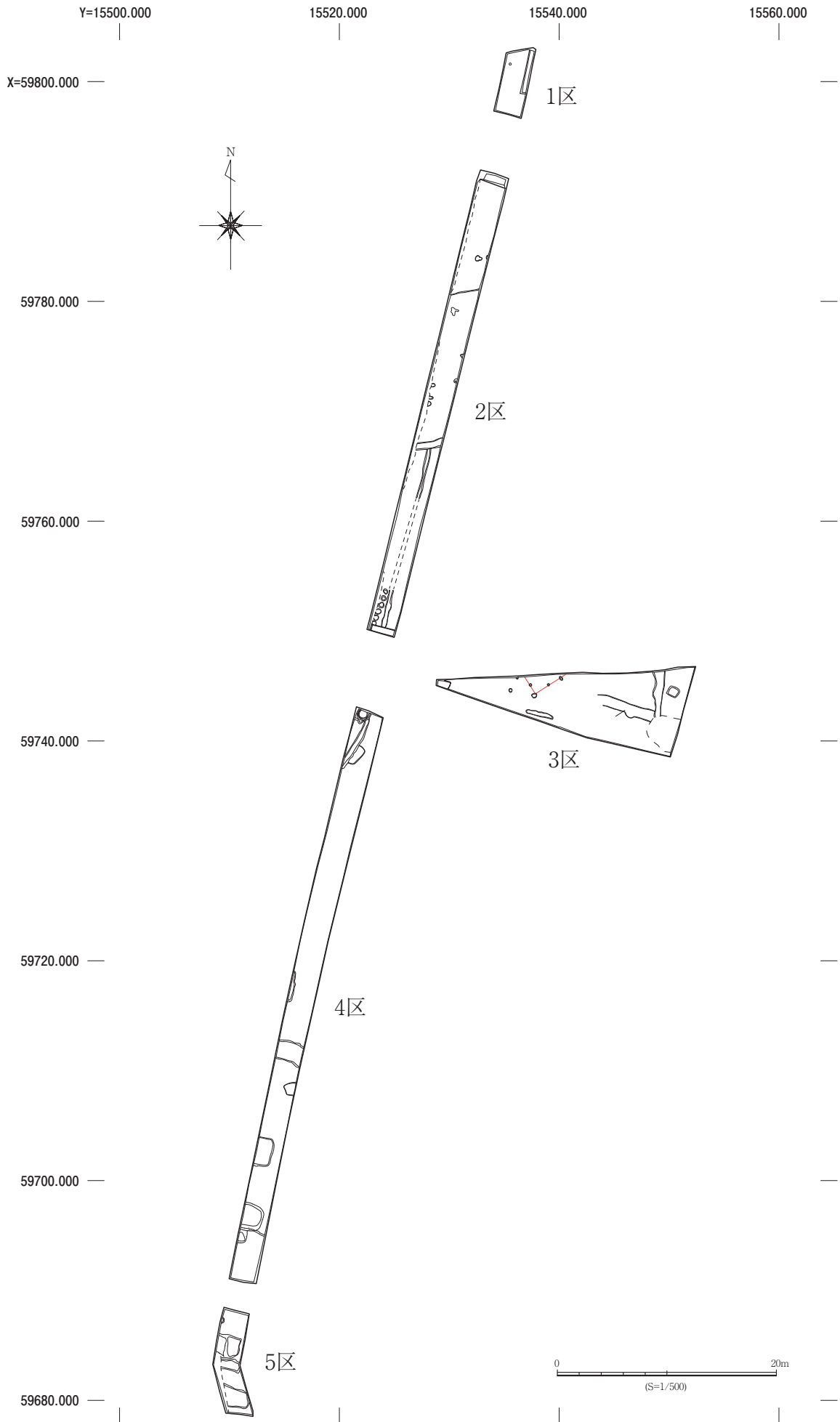


図2 調査区配置図 (S=1/500)

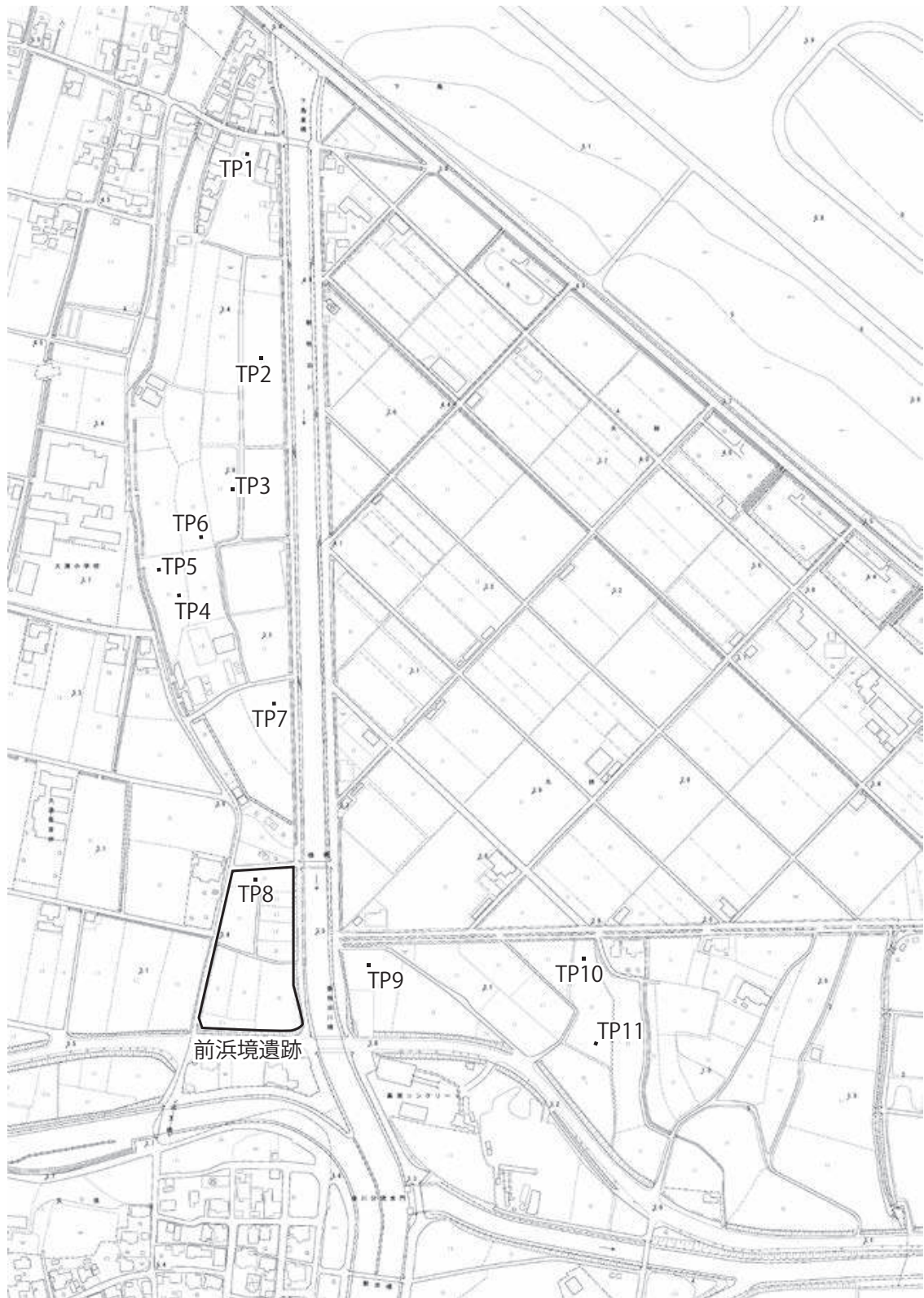


図3 試掘確認調査トレンチ配置および遺跡位置図 (S=1/5,000)

第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

前浜境遺跡の所在する南国市は、北緯 33 度 34 分、東経 133 度 38 分に位置し、東西約 12 km、南北約 23 km、面積 125.35 km² を測る。高知県のほぼ中央部にあたり、東を香美市・香南市、西を高知市、北を土佐町・本山町と接し、南は土佐湾から太平洋に開ける。人口は 2020 年 1 月現在で 48,688 人である。主な産業は農業であり、かつては米の二期作の中心地であった。現在は 7 月の中旬には刈り入れを始める早場米の産地として知られている。海岸部では施設園芸が盛んなほか、十市のヤマモモ、白木谷の四方竹などの特産品も有名である。高知空港、高速道路、JR 土讃線、ごめんなはり線、路面電車などの交通の結節点であり、高知新港も近く高知県の物流拠点としての役割をもつ。

市域の北半分は四国山地より連なる山地で占められる。その大部分は古生代ペルム紀の上八川層と白木谷層によって形成される。市域の北境界線付近では、上八川層の標高は約 800 m に達するが、南下するに従って次第に高度を下げ、白木谷層では標高 300 ～ 400 m となり、やがて標高 150 m 前後の丘陵となって、ついには平野に没してゆく。

市域の南半分を占める平野部は、物部川や国分川・舟入川の堆積作用により形成された扇状地であるが、高知平野の東部を占め、長岡郡と香美郡にまたがることから香長平野とも呼ばれている。香長平野は、舟入川を境に北側を古期扇状地、南側を新期扇状地に二分できる。古期扇状地は洪積世の最終氷期に形成された礫層堆積物でおおわれており、長岡台地と呼ばれている。土佐国衙跡や土佐国分寺跡、比江廃寺などは長岡台地上に立地している。一方、新期扇状地は物部川の堆積作用による沖積平野であり、香長平野の大部分を占める。ここでは自然堤防がよく発達し、その上には南四国における弥生時代の拠点集落である田村遺跡群をはじめ、弥生時代の集落跡が多数分布している。

前浜境遺跡は南国市の香長平野南東部に位置し、北には田村遺跡群を中心に弥生時代の集落跡が広がっている。また、南部には東西に伸びる最大幅約 500 m、標高凡そ 11 m に達する浜堤が横たわっている。遺跡の東は物部川の氾濫原が広がっている。遺跡の東に秋田川が隣接して南流し、浜堤が途切れる前浜の切戸から太平洋へと流れている。

2. 歴史的環境 (図 4)

南国市は洪積平野と沖積平野を有し、古くから人々の生活に適した地であった。その営みの痕跡である遺跡の数は 301 にのぼる。これは高知県の遺跡総数の約 1 割を占め、県下で最も遺跡の分布が集中する地域である。平野部を中心に旧石器時代以降の各時代の遺跡の存在が知られており、それぞれの時代について概観する。

①旧石器時代

高知平野周辺では、南国市との境である高知市介良の高間原古墳群 1 号墳の石室流入土中より出土した 1 点の細石器が知られるのみであり、「旧石器の空白地帯」と称されるほどその様相はほと

んど判明していなかった。平成6～8年にかけて四国横断自動車道の建設に伴う発掘調査が行われた奥谷南遺跡（南国市岡豊町）において、細石刃400点、細石核150点、ナイフ形石器50点などが出土した。AT上層にナイフ形石器の2枚の文化層があり、旧石器時代終末の細石器文化期の遺物が集中し、層中から植物食利用を示す叩石が共伴することが明らかになった。

②縄文時代

縄文時代の遺跡は県西部の四万十川流域に比べて少なく、数ヶ所が確認されているにすぎない。奥谷南遺跡では草創期～中期の土器、中期末の堅果類の貯蔵穴が出土した。奥谷南遺跡の南麓である栄エ田遺跡（南国市岡豊町）からは、後期初頭～晩期終末の土器と共に30点程の磨製石斧が出土した。これらの遺跡は、丘陵部が平野部に接する地に立地しており、狩猟・採集に適した地域である。南の平野部では、田村遺跡群（南国市田村）の第1期調査（1980～1983年）で後期の彦崎KⅠ式土器が、第2期調査（1997～2000年）で鐘崎式土器が出土し、九州との関連が窺える。

③弥生時代

弥生時代になると遺跡数とその規模は、急激に発展する。稲作に適した広大な沖積平野を有することから、平野部のほぼ全域に遺跡が展開している。

なかでも田村遺跡群は、その規模において群を抜いており、高知平野における拠点的母村集落と考えられる。第1期調査では前期初頭の集落跡と小区画水田跡、中期末から後期前半の集落跡が出土し、検出された竪穴建物跡は60棟、掘立柱建物跡も14棟にのぼる。第2期調査では前期の環濠集落と前期末～中期前半の集落、中期後半～後期中葉の集落が移動を伴って変遷している様子が確認された。第3期調査では遺跡の範囲が大きく北に拡大することが判明し、他調査区でほとんど検出されなかった弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構も確認された。これまで検出された竪穴建物跡は合計で495棟となり、屈指の大規模集落である。

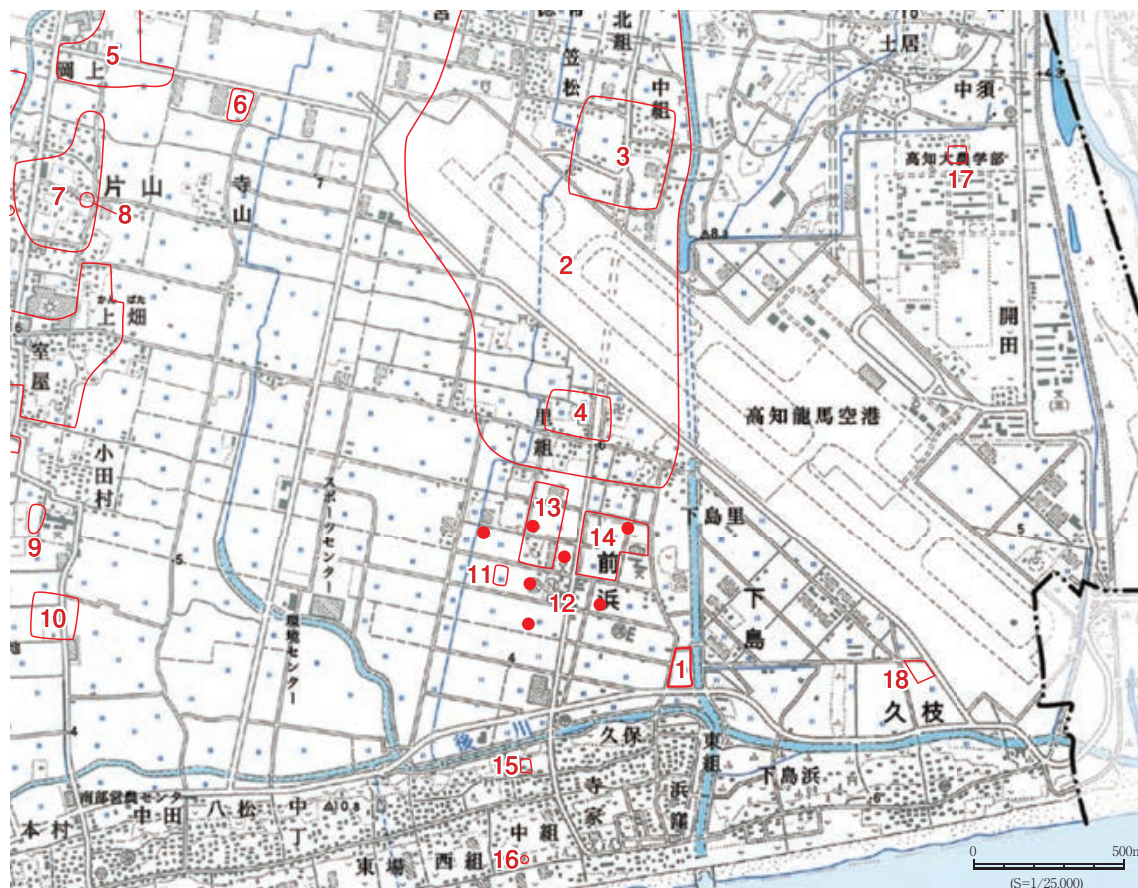
田村遺跡群周辺の地域や中小河川流域では、前期後半～末葉にかけて小規模ながら大篠遺跡（南国市大埴）、栄エ田遺跡、岩村遺跡（南国市福船）などの遺跡が散見されるようになる。

中期になると遺跡数は一転して激減し、特に中期前半の遺構は高知平野ではほとんど見られなくなり、田村遺跡群で土坑や竪穴住居が少数確認されているのみである。中期後半～後期中葉にはピークを迎えた田村遺跡群が衰退する一方、周辺部にあたる東崎遺跡（南国市東崎）、岩村遺跡、小籠遺跡（南国市岡豊町）などの中小集落が後期中葉から終末にかけて成立し、高知平野一帯に爆発的に展開していく。

④古墳時代

南国市岡豊町・久礼田・植田の平野と接する丘陵部は高知県最大の後期古墳の密集地である。なかでも小蓮古墳は県下最大の横穴式石室をもつ円墳であり、香長平野北部を中心とする有力豪族の墳墓と考えられる。22基の古墳からなる県下最大の群集墳である舟岩古墳群もこの地域に築造されている。従来、高知平野における前期古墳はその存在が全く知られてなかったが、平成6年の四国横断自動車道に伴う長畝古墳群（南国市岡豊町）の調査で、同一丘陵上から4世紀前半・5世紀後半・6世紀前半の古墳（長畝2～4号墳）が確認された。

弥生時代後期終末から引き続き営まれる古墳時代初頭の集落は香長平野で数多く調査されてい



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	前浜境遺跡	古代～中世	7	中組遺跡	弥生～中世	13	季重遺跡	古墳～近世
2	田村遺跡群	縄文～近世	8	片山土居城跡	中世	14	司例田遺跡	古墳～近世
3	田村城跡	中世	9	城ノ後遺跡	古墳～平安	15	中屋敷遺跡	弥生
4	千屋城跡	中世	10	蚊居田土居城	中世	16	前浜砲台跡	近世
5	岡の上組遺跡	弥生～中世	11	公家ノ前遺跡	古墳～室町	17	旧高知海軍航空隊通信所跡	近代
6	鹿枝遺跡	弥生～平安	12	前浜掩体群	近代	18	辻淵遺跡	中世

図4 前浜境遺跡周辺の遺跡

る。古墳時代中期以降の調査例は少ないが、土佐国衙跡（南国市比江）ではこれまでの調査で42棟の竪穴建物跡が出土している。

⑤古 代

古代の律令制度のもとでの土佐国を伝える遺跡として、比江廃寺や土佐国衙跡、土佐国分寺跡が所在しており、古代土佐の政治・文化の中心地であったことを示している。

比江廃寺（南国市比江）は白鳳時代の瓦が出土した寺院跡であり、現存している塔心礎は原位置を保っており、8世紀以降に据えられたことが発掘調査により確認された。土佐国衙跡では、昭和54年から31次にわたる確認調査が行われ、官衙を構成すると考えられる掘立柱建物群などが検出されているが、政庁などの国衙中枢の遺構は確認できていない。土佐国衙跡の北方1kmに位置する白猪田遺跡（南国市久礼田）では地鎮祭祀の跡や緑釉輪花皿が出土し、「国府集落」としての性格づけがなされている。土佐国分寺跡（南国市国分）では現状変更に伴う調査および伽藍配置確認のための調査が行われ、礎石建物跡、掘立柱建物跡などが検出されている。

⑥中 世

中世になると遺跡数も増加し、分布も平野部の城館跡や山麓部の山城跡などほぼ全域にわたる。現在確認されている南国市内の中世城館跡は47ヶ所にのぼる。これらに伴い生活域も拡散し、現在我々が目にしている景観の基礎がほぼ形成された。

長宗我部氏の居城であった岡豊城跡は詰、二ノ段、三ノ段などから礎石建物跡が検出され、史跡公園として整備されている。近年、南斜面の伝家老屋敷曲輪の調査も進められ、国分川から詰への登城ルートが推定されている。岩村土居城跡（南国市福船）では城を囲む2重の堀が発掘された。この堀は出土遺物から14～15世紀に機能していたと考えられる。

田村城跡は14～15世紀の守護代細川氏の居館であり、城郭は3重の堀で囲まれた複合城郭である。郭内には区画溝や掘立柱建物跡が存在しており、外堀の幅は4～5m、深さ3.5mを測り、この中からは土師質土器や護符が出土している。高知空港拡張に伴う田村遺跡群発掘調査では、田村城跡の南側で溝に囲まれた屋敷跡が31ヶ所検出されており、南北朝期に機能したもの、守護代細川氏の入部後に機能したもの、長宗我部氏の台頭期に機能したものの3時期に区分することができる。

⑦近世以降

山内氏の土佐入国による高知城築城以降、土佐の中心地は高知市域に移った。長岡台地は当時未墾の荒地であったが、藩政初期の野中兼山による新田開発の際、諸役・諸税御免として入植を奨励し、御免町が生まれた。今は後免と改められ、南国市の中心街となっている。

近年戦争遺跡を平和学習に積極的に活用していこうという動きが全国的に見られているなか、陣山遺跡では海軍の送信所跡地が発掘され、砲弾類が多数出土した。向山防空陣地関連遺跡では、「本土決戦」に備えた尾根上の陣地の構造が明らかにされている。また南国市前浜には、旧高知海軍航空隊所属の飛行機の格納庫であった掩体が7基残存しており、平成18年2月に南国市史跡「前浜掩体群」として指定された。

参考文献

- 『南国市史 上巻・下巻』南国市教育委員会 1979年
- 松村信博『奥谷南遺跡Ⅰ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999年
- 松村信博『栄エ田遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- 『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』高知県教育委員会 1986年
- 『田村遺跡群Ⅱ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年
- 『田村遺跡群Ⅲ』（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2015年
- 出原恵三『小籠遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 廣田佳久・池澤俊幸『長畝古墳群 高知自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 『土佐国衙跡発掘調査報告書 第1～11集』高知県教育委員会・南国市教育委員会 1980～1991年
- 三谷民雄『白猪田遺跡』南国市教育委員会 1997年
- 山本哲也『土佐国分寺跡 第1～3次発掘調査概報』南国市教育委員会 1988～1991年
- 宅間一之『高知県南国市 中世城館跡』南国市教育委員会 1985年
- 三谷民雄『岩村遺跡群Ⅲ』南国市教育委員会 1998年
- 三谷民雄『岩村遺跡群Ⅳ』南国市教育委員会 1999年
- 森田尚宏・松田直則・岡本桂典『岡豊城跡』高知県教育委員会 1990年
- 出原恵三・吉成承三・浜田恵子・佐竹 寛『陣山遺跡、陣山北三区遺跡』
（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 浜田恵子他『小籠遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 久家隆芳『岡豊城跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- 廣田佳久・小野由香『西野々遺跡Ⅰ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008年
- 廣田佳久『西野々遺跡Ⅱ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011年
- 廣田佳久『西野々遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011年
- 出原恵三『向山戦争遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 松本安紀彦『祈年遺跡Ⅰ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011年
- 近藤孝文『祈年遺跡Ⅱ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 前田光雄『祈年遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 前田光雄『祈年遺跡Ⅳ』（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年

第三章 調査の成果

1. 調査の概要と基本層序 (図5～8)

今回の調査では、320 m²を調査し、掘立柱建物跡1棟、土坑11基、溝6条、段状遺構1基、ピット列などが検出された。時期としては判別できないものが多い。中世～近世の遺構・遺物が大半を占め、表土および包含層から弥生土器片や古代に属する遺物が出土している。調査対象地は4枚の耕作地に分かれており、畦で調査区が分かれることから、北から順に1区～5区と命名して調査した。以下に各調査区の概要を記す。

(1) 1区

試掘確認調査でTP8を設定した水田の西端にあたる。今回の調査では最北部に位置する調査区である。耕作土直下から河床礫を多く含む地山層が露出し初め、更にその下は人頭大の大型河床礫層になった。調査区内から遺構は確認できなかったが、弥生土器、土師器、須恵器などが耕作土内および礫層上面から出土した。

(2) 2区

1区から畦畔を挟み南部に位置する調査区である。主な遺構は溝状遺構1条、段状遺構2基、ピット列1列を検出した。層序は1層耕作土、2層灰褐色砂質シルト、3層明褐色粘土質シルトで、調査区中央にのみ河床礫を多く含む4層褐灰色粘土質シルトが堆積している。5層以下が無遺物層であり、遺構も5層上面から掘り込まれている。調査区北端では、1区から続く河床礫層が露出しており、南にいくにしたがって下層へ潜り込んでいる。

(3) 3区

2区南部から東に位置し、三角形状に広がる調査区である。主な遺構は掘立柱建物跡1棟、溝状遺構3条、土坑1基を検出した。層序は1層耕作土、2層灰褐色砂質シルトで、西側には3層明褐色粘土が広がる。4層は褐色砂質シルトの無遺物層であり、遺構も4層上面から掘り込まれている。2区より遺構検出面が高い位置にあることから、自然堤防の頂点に位置すると思われる。

(4) 4区

2区の南に位置する調査区である。主な遺構は溝状遺構2条、土坑7基を検出した。層序は1層耕作土で、南半部にのみ2～3層が堆積し、4層粘土質シルトである。SD10は4層下面からの掘り込みで、SK11、13、16、18、SD14は4層上面から掘り込まれており、SK17はSK18との切り合い部分で3層を切っている。7層は2区の5層と同じ層である。

(5) 5区

今回の調査で最も南に位置する調査区である。耕作土直下に明褐色砂質シルトが堆積しており、遺構は土坑3基がこの層の上面から掘り込まれている。

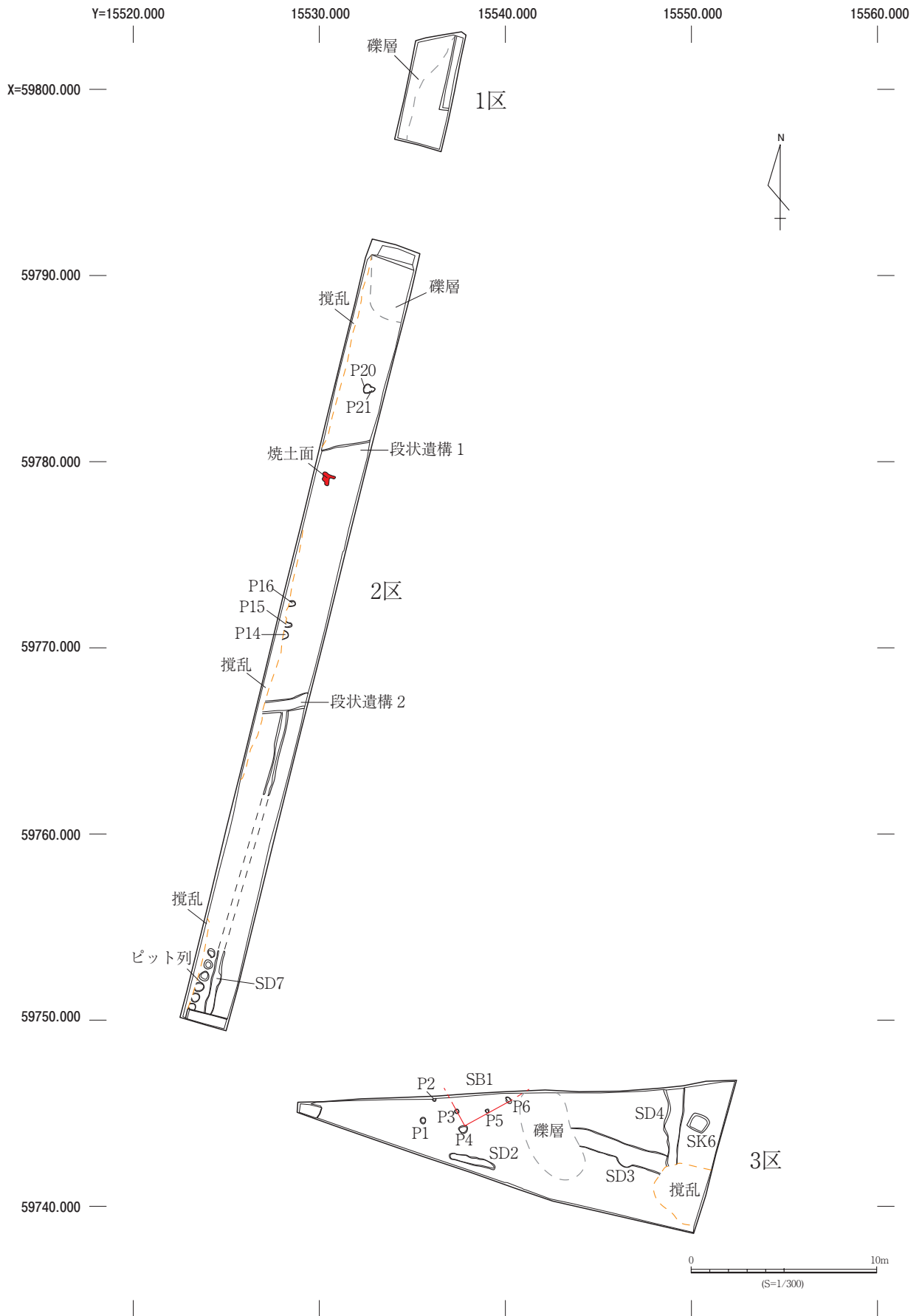


図5 1区～3区遺構配置図 (S=1/300)

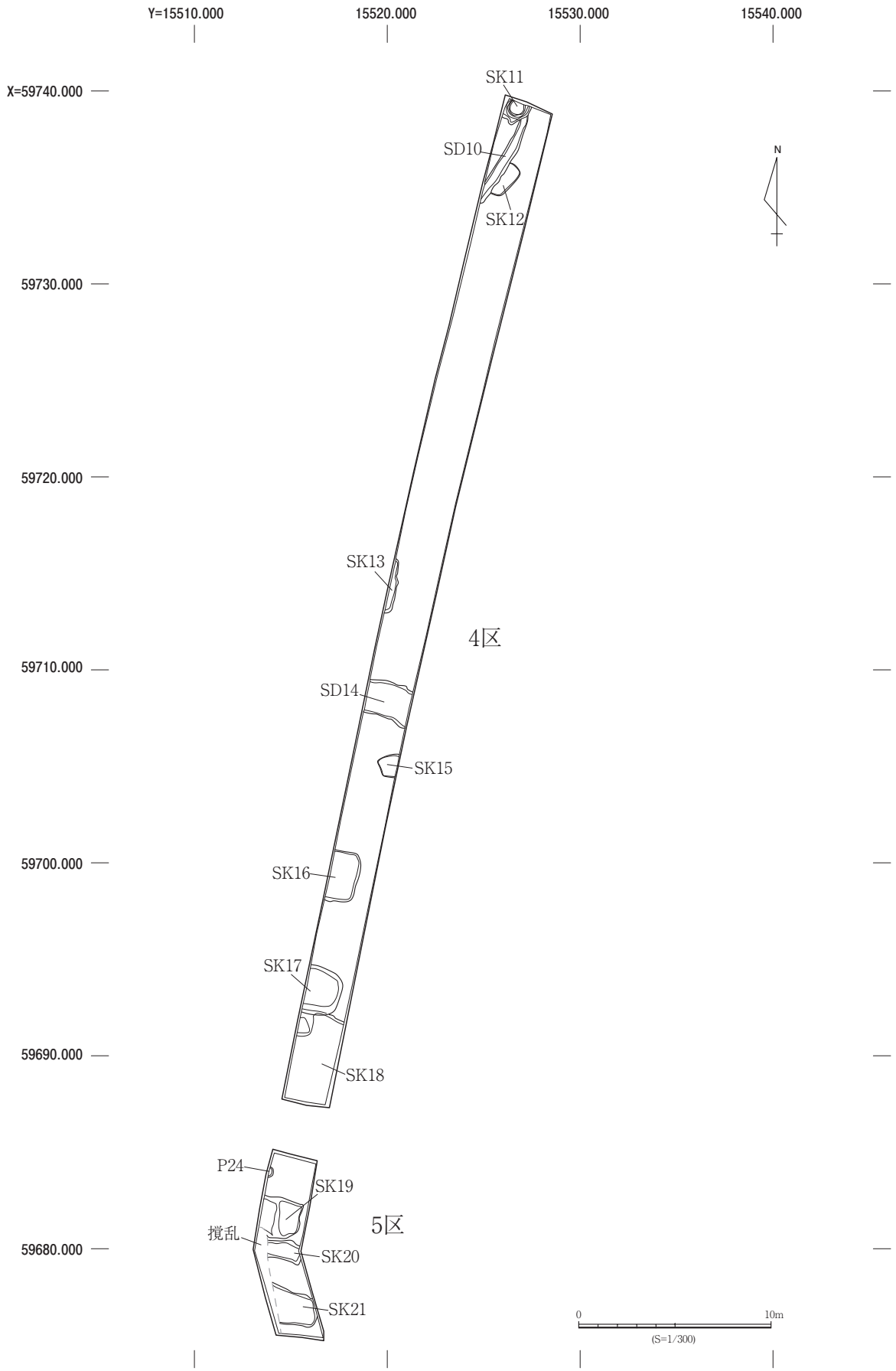


图6 4区·5区遺構配置図 (S=1/300)

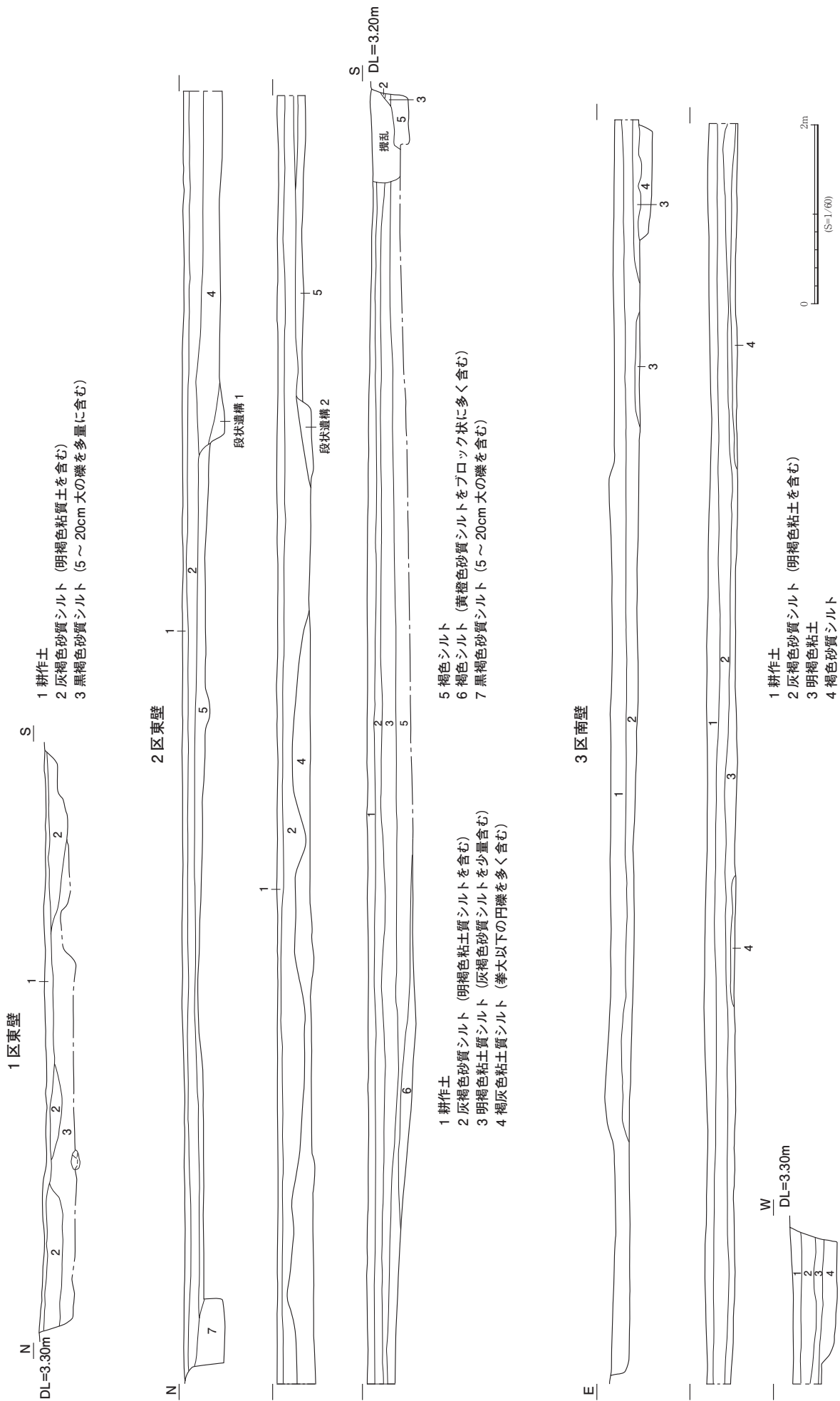
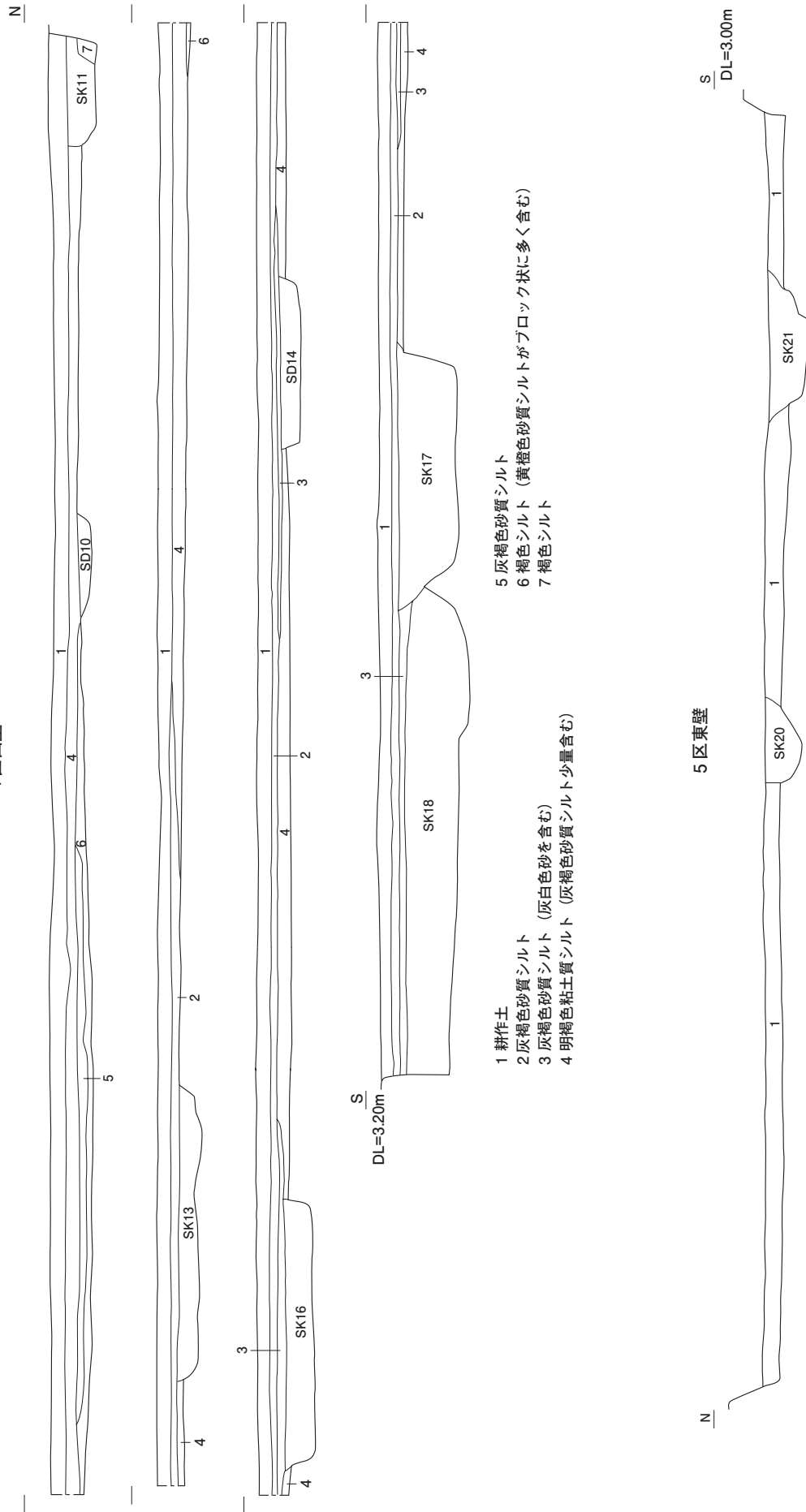


図 7 1 区 ~ 3 区調査区土層図

4区西壁



- 1 耕作土
- 2 灰褐色砂質シルト
- 3 灰褐色砂質シルト (灰白色砂を含む)
- 4 明褐色粘土質シルト (灰褐色砂質シルト少量含む)
- 5 灰褐色砂質シルト
- 6 褐色シルト (黄褐色砂質シルトがブロック状に多く含む)
- 7 褐色シルト

1 明褐色砂質シルト (灰褐色砂質シルトを少量含む)

図8 4区・5区調査区土層図

2. 検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構は、ピット以外はすべての遺構を連番の通し番号として遺構種別ごとにSK、SDなどの記号をふった。以下に遺構種別ごとに記述する。

(1) 掘立柱建物跡

SB1 (図9)

3区中央部に位置する。P3～P6の4基の柱穴を検出した。南辺2間、西辺1間を確認し、調査区外に延びている。柱間距離は東西で1.30～1.60m、南北で1.00mである。P3は直径23cm、深さ13cm、P4は直径47cm、深さ13cm、P5は直径20cm、深さ14cm、P6は直径25cm、深さ11cmである。主軸はN-27°-Wである。埋土はいずれも明褐色粘土を斑状に含む灰褐色砂質シルトである。遺物は確認できなかった。

(2) 土坑

SK6 (図10)

3区東端部に位置する。平面隅丸方形を呈し、一辺が約1.04m、深さが19cmである。埋土は1層黒褐色砂質シルト、2層明褐色粘土を斑状に含む灰褐色砂質シルト、3層拳大以下の円礫を含む黒褐色シルトである。遺物は土器細片が7点出土したが、図示できるものはなかった。

SK11 (図10・14)

4区北端部で検出した遺構である。平面プランは円形を呈し、直径1.24m、深さ27cmである。4区の4層上面から掘り込まれている。埋土は灰褐色砂質シルトとブロック状の明橙色粘土と地山を含む明褐色砂質シルトである。SD10の北部を切っている。遺構の底面外周には幅14cm、深さ

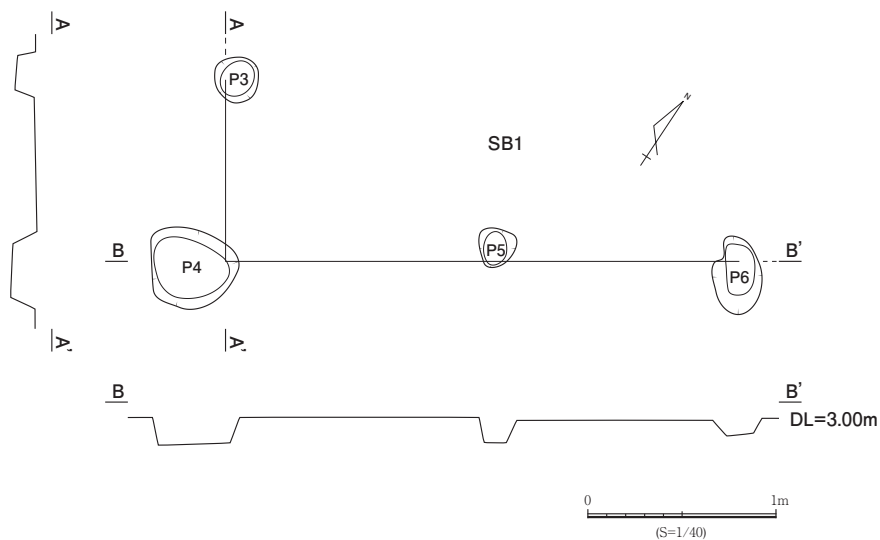
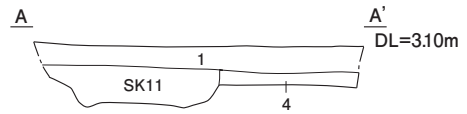
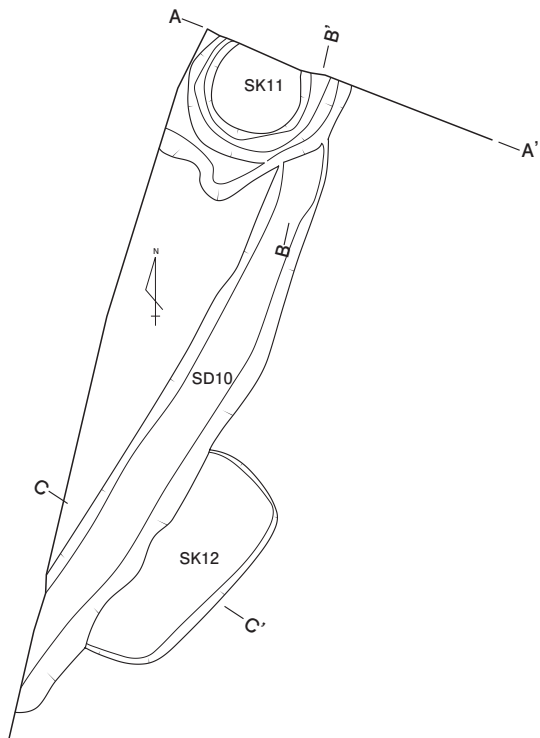
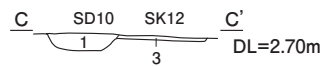
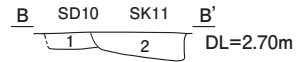


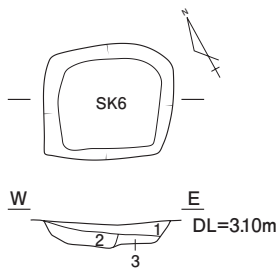
図9 SB1 遺構図



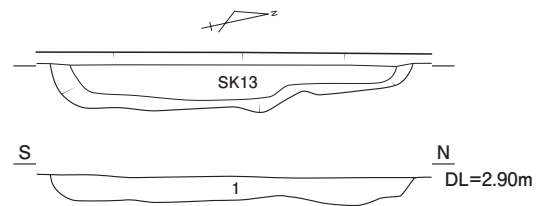
- 1 耕作土
- 4 明褐色粘土質シルト (灰褐色砂質シルトを含む)



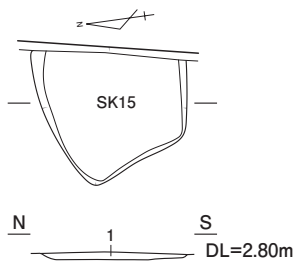
- 1 灰褐色砂質シルト (明褐色粘土を斑状に含む)
- 2 明褐色砂質シルト (灰褐色砂質シルトとブロック状の明褐色粘土と地山を含む)
- 3 灰褐色砂質シルト



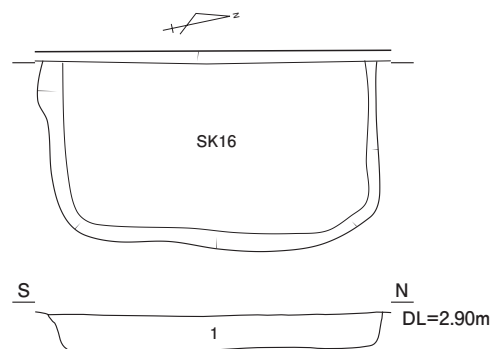
- 1 黒褐色砂質シルト
- 2 灰褐色砂質シルト (明褐色粘土を斑状に含む)
- 3 黒褐色シルト (拳大以下の円礫を含む)



- 1 灰白色砂



- 1 灰褐色砂質シルト (明褐色粘質土を多く含む)



- 1 灰白色砂

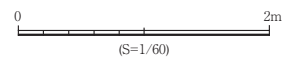


図 10 SK6・11・12・13・15・16, SD 10 遺構図

2 cm 程度の周溝が掘られている。遺物は須恵器や土師器などが出土し、その内 3 点を図示した。1・2 は須恵器の蓋である。1 は焼成が甘く内外面共に白色が強い。口縁端部はやや丸みを帯びる。3 は土師器釜口縁部である。口縁部に接して断面三角形の羽が貼り付けられており、胎土に粗粒砂を多く含む。

SK12 (図 10)

4 区北部で検出した遺構である。平面プランは楕円形を呈し、南北 1.84 m、東西 0.68 m 以上、深さは 4 cm である。埋土は灰褐色砂質シルトである。西半部は SD10 に切られている。遺物は土器細片が若干含まれる。

SK13 (図 10)

4 区中央部で検出した土坑である。南北 2.88 m、東西 0.36 m 以上、深さ 19 cm である。検出面から垂直に掘り込まれている。埋土は灰白色砂である。遺物は確認できなかった。

SK15 (図 10)

4 区中央部で検出した土坑である。東西 1.06 m 以上、南北 1.16 m、深さ 6 cm で平面プランは東半部が調査区外になるが、楕円形に近い不整形をしている。埋土は明褐色粘土を多く含む灰褐色砂質シルトである。遺物は確認できなかった。

SK16 (図 10・14)

4 区南部で検出した土坑である。東西 1.46 m 以上、南北 2.65 m、深さ 28 cm で平面プランは隅丸方形に近い形状をしている。4 区の 4 層上面から垂直に掘り込まれている。埋土は灰白色砂である。近世の磁器片や瓦片などが出土し、そのうち 2 点を図示した。4 は陶器である。平底の鉢底部で底部から胴部にかけて直線的にたちあがる。5 は染付碗である。

SK17 (図 11・15)

4 区南端部で検出した土坑である。SK17 は東西約 1.83 m 以上、南北 2.50 m、深さ 58 cm で平面プランは楕円形に近い形状をしている。南辺が SK18 と 4 区の 3 層を切って掘り込まれている。埋土は灰白色砂で、SK18 より僅かに SK17 の方がやや黒みがかった。

遺物は多量の陶磁器、瓦が出土した。そのうち 24 点 (6～29) を図示した。6 は須恵器壺肩部片である。7 は土師器甕口縁である。8 は備前焼播鉢口縁で、口縁を拡張して端部に面を持つ。9・10 は青磁碗である。9 は口縁で外面に細蓮弁文を施す。10 は底部で内面に劃花文を施す。11・12 は白磁である。13～18 は染付である。19～29 は陶器である。19 は尾戸焼碗である。20 は碗底部で内面見込みに五弁花を施す。瀬戸焼と思われる。24 は肥前の鉢底部である。26 は土瓶底部で外面に厚く煤が付着している。27 は瀬戸焼火鉢口縁である。28・29 は甕で口縁部を肥厚させたいわゆる「ハンド」である。

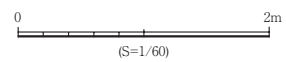
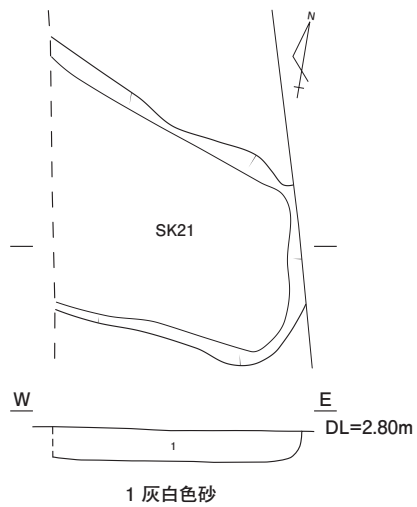
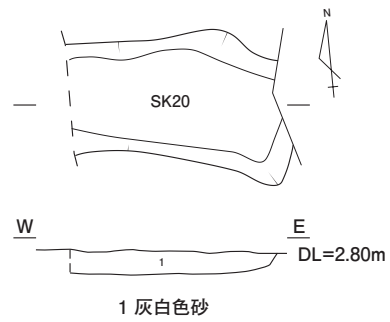
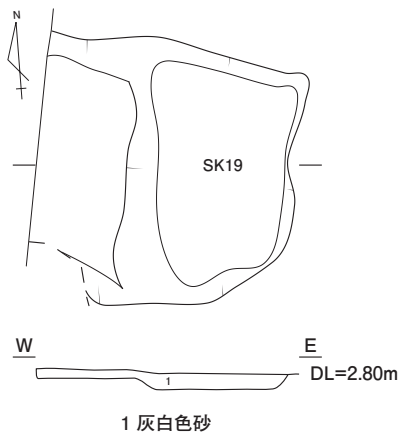
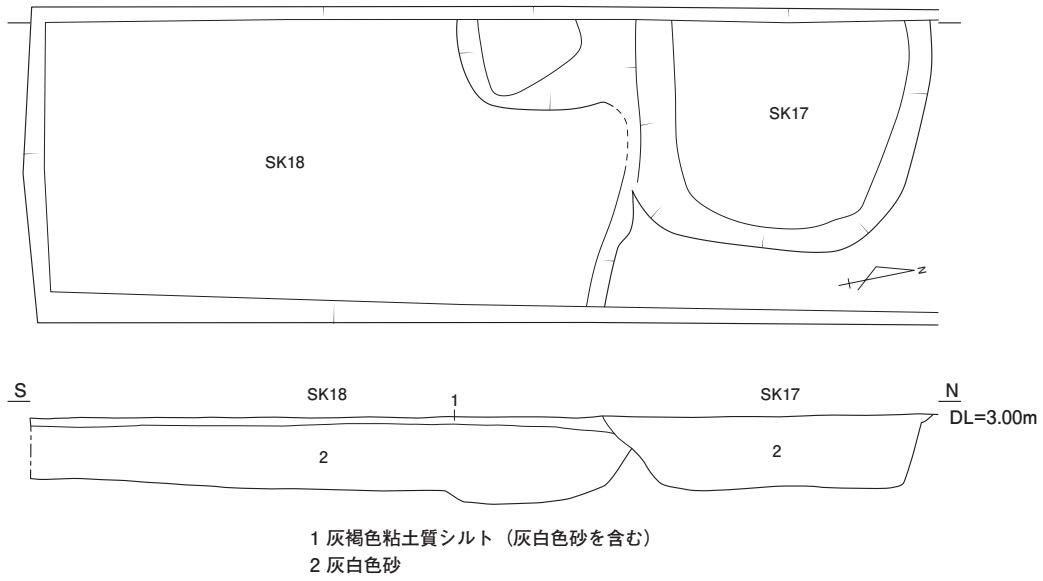


図 11 SK17 ~ 21 遺構図

遺物から見る時期は一部須恵器や土師器、青磁、備前焼など古い様相のものもあるが、18世紀後半から19世紀代のものが多く出土している。

SK18 (図11・16)

4区南端部で検出した土坑である。SK18は今回の調査で最も規模の大きい土坑で、調査区内には一部しか掛からなかったため全容は不明だが、東西2.20 m以上、南北4.80 m以上、深さは52 cmである。埋土は灰白色砂である。遺物は土師器や染付、瓦などが出土した。出土量は遺構規模に比して少なく、3点(30～32)を図示した。30は染付である。31・32は陶器碗である。31は尾戸焼の筒形碗口縁である。32は瀬戸焼碗底部でSK17の20と同じ製品である。

SK19 (図11)

5区中央部で検出した土坑である。各基とも西部は攪乱を受けており、これは隣接する側溝工事によるものと思われる。SK19は東西2.00 m以上、南北は2.10 m、深さ12 cmである。平面プランは不整形で、埋土は灰白色砂である。遺物は確認できなかった。

SK20 (図11)

5区中央部で検出した土坑である。西端は攪乱に切られている。東西1.64 m以上、南北1.10 m、深さ20 cmである。平面プランは不整形な長楕円形である。埋土は灰白色砂である。遺物は土器細片3点、陶器細片1点、瓦片が出土したが図示できるものはなかった。

SK21 (図11)

5区中央部で検出した土坑である。西端は攪乱に切られている。東西2.06 m以上、南北1.60 m、深さ27 cmである。平面プランは楕円形である。埋土は灰白色砂である。遺物は瓦片が出土したのみで図示できるものはなかった。

(3) 溝状遺構

SD2 (図12)

3区中央部に位置する東西に延びる溝である。長さ2.56 m、幅0.44 m、深さ5 cmである。埋土は明褐色粘土を斑状に含む灰褐色砂質シルトである。遺物は確認できなかった。

SD3・4 (図12・16)

3区東部に位置する。SD3は幅1.08 m、深さ8 cmで東西方向に、SD4は幅0.88 m、深さ9 cmで南北方向に延び、両溝が交わる南東部が攪乱により切られている。埋土はいずれも明褐色粘土を斑状に含む灰褐色砂質シルトである。平面・断面観察からSD4がSD3を切っていると判断した。出土遺物は土師質土器の細片が多く、その多くは内外面ともに摩耗が激しく調整が不明瞭である。図示できた遺物はSD3から2点(33・34)、SD4から5点(35～39)の計7点である。33は土師

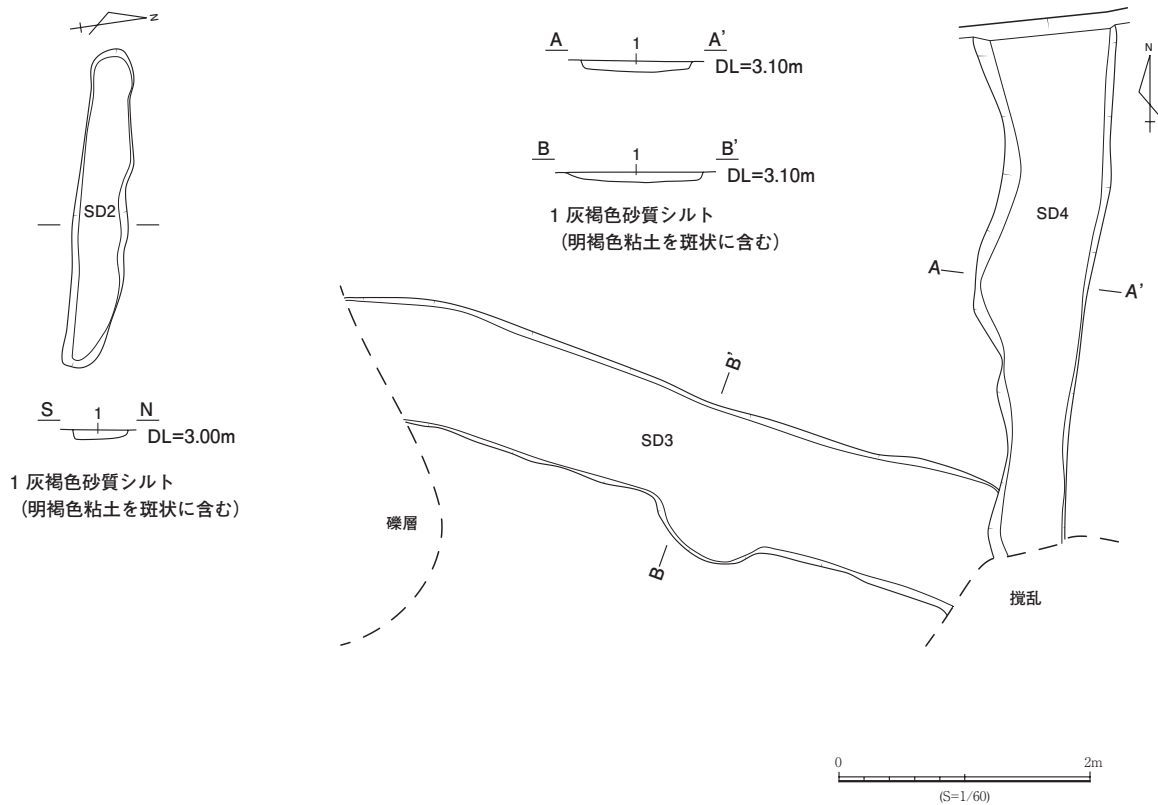


図 12 SD2～4 遺構図

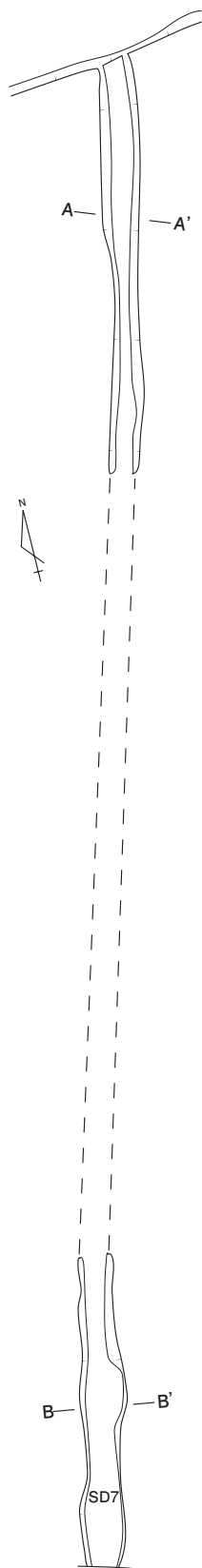
質土器杯である。底部切り離しは回転糸切りである。34 は染付小杯である。35～38 は土師質土器である。35～37 は口縁で端部が外反している。39 は瓦器碗口縁である。

SD7 (図 13)

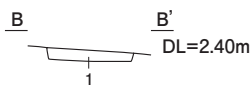
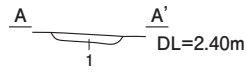
2区南半部で南北方向に直線的に延びる溝である。間が途切れて検出したが、埋土・規模・方向が一致することから、同一遺構と判断した。北端は段状遺構 2 に切られている。検出長は 16.84 m、幅 0.46 m、深さ 6 cm である。埋土は明褐色粘土質シルトを少量含む灰褐色砂質シルトである。南の延長線上に 4 区の SD10 があり、同様の埋土を有していることから同一遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。

SD10 (図 10・16)

4区北端部で南北に延びる溝である。検出長 4.44 m、幅 0.58 m、深さ 13 cm である。埋土は明褐色粘土を斑状に含む灰褐色砂質シルトである。北部は 2 区の SD7 と繋がるものと思われる。隣接する SK12 の西部を切り、溝の北端部は SK11 に切られている。溝の南部は西方向へと湾曲している。図示できた遺物は 1 点である。40 は土師質土器の碗底部である。低い高台を貼り付けている。



0 2m
(S=1/80)

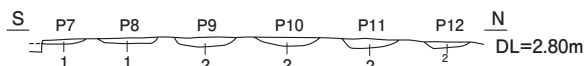
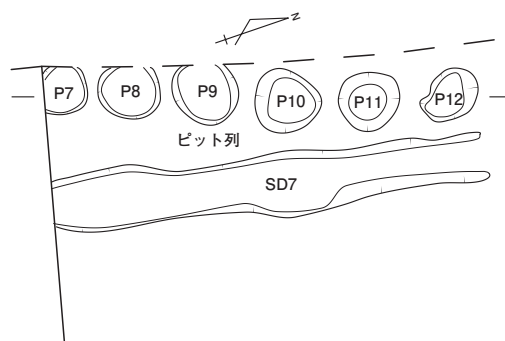
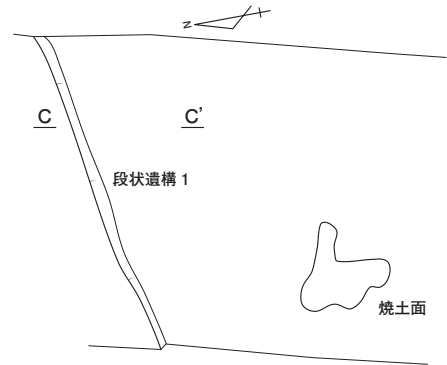
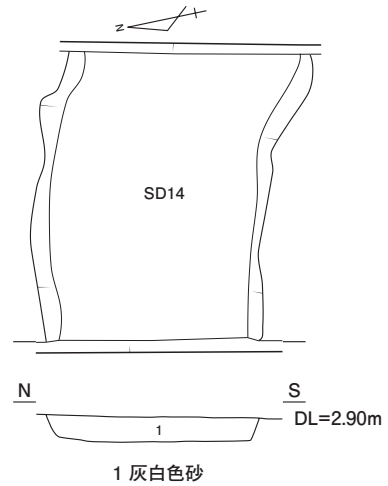


1 灰褐色砂質シルト
(明褐色粘土質シルトを少量含む)



1 褐灰色粘土質シルト

0 1m
(S=1/40)



1 褐灰色粘土質シルト
2 灰褐色砂質シルト (明褐色粘土質シルトを少量含む)

0 2m
(S=1/60)

図 13 SD7・SD14, 段状遺構 1, ピット列遺構図

SD14 (図 13)

4区中央部で検出した東西に延びる溝である。幅 1.70 m、深さ 19 cm である。浅いが断面箱掘り状に掘り込まれており、南東部に向かってやや湾曲している。埋土は灰白色砂である。遺物は出土しなかった。

(4) その他の遺構

段状遺構 1 (図 13)

2区中央部で北側を切って平坦面を造り出している。深さ 14 cm である。埋土は褐灰色粘土質シルトで炭化物を含んでいる。埋没後、河床礫を多量に含む粘土質シルトにより埋没している。西側の床面には焼土面がある。床面から施釉陶器小片が 1 点出土しているが図示できるものはなかった。

段状遺構 2

2区南部で南側を切って平坦面を造り出している。検出規模は幅 0.71 m、深さ 14 cm である。SD7 を切っている。埋土は褐灰色粘土質シルトである。段状遺構 1 同様、埋没後に河床礫を多量に含む粘土質シルトにより埋没している。遺物は出土しなかった。

ピット列 (図 13)

2区南部で検出した SD7 の西側に南北方向に並ぶピット列である。P7～12 の 6 基のピットで構成されている。軸方向は凡そ N-23°-E である。

P7 は直径約 34 cm、深さ 4 cm、P8 は直径 48 cm、深さ 5 cm、P9 は直径 54 cm、深さ 7 cm、P10 は直径 52 cm、深さ 7 cm、P11 は直径 49 cm、深さ 8 cm、P12 は直径 40 cm、深さ 5 cm といずれも同じような大きさ、深さである。埋土は P7・8 が褐灰色粘土質シルト、P9～12 は明褐色粘土質シルトを少量含む灰褐色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。西野々遺跡や田村西遺跡でも同様の遺構が見つかるが、性格は不明である。いずれも非常に浅いピットであり、短い間隔で連続していることから、何らかの地業痕跡の可能性もある。

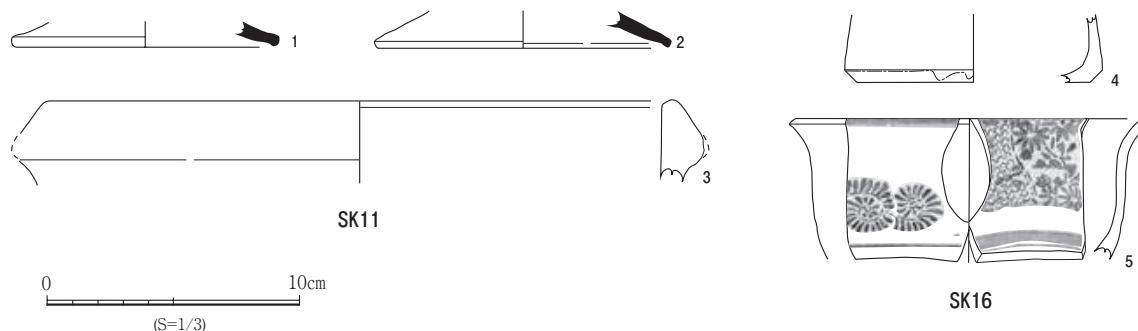
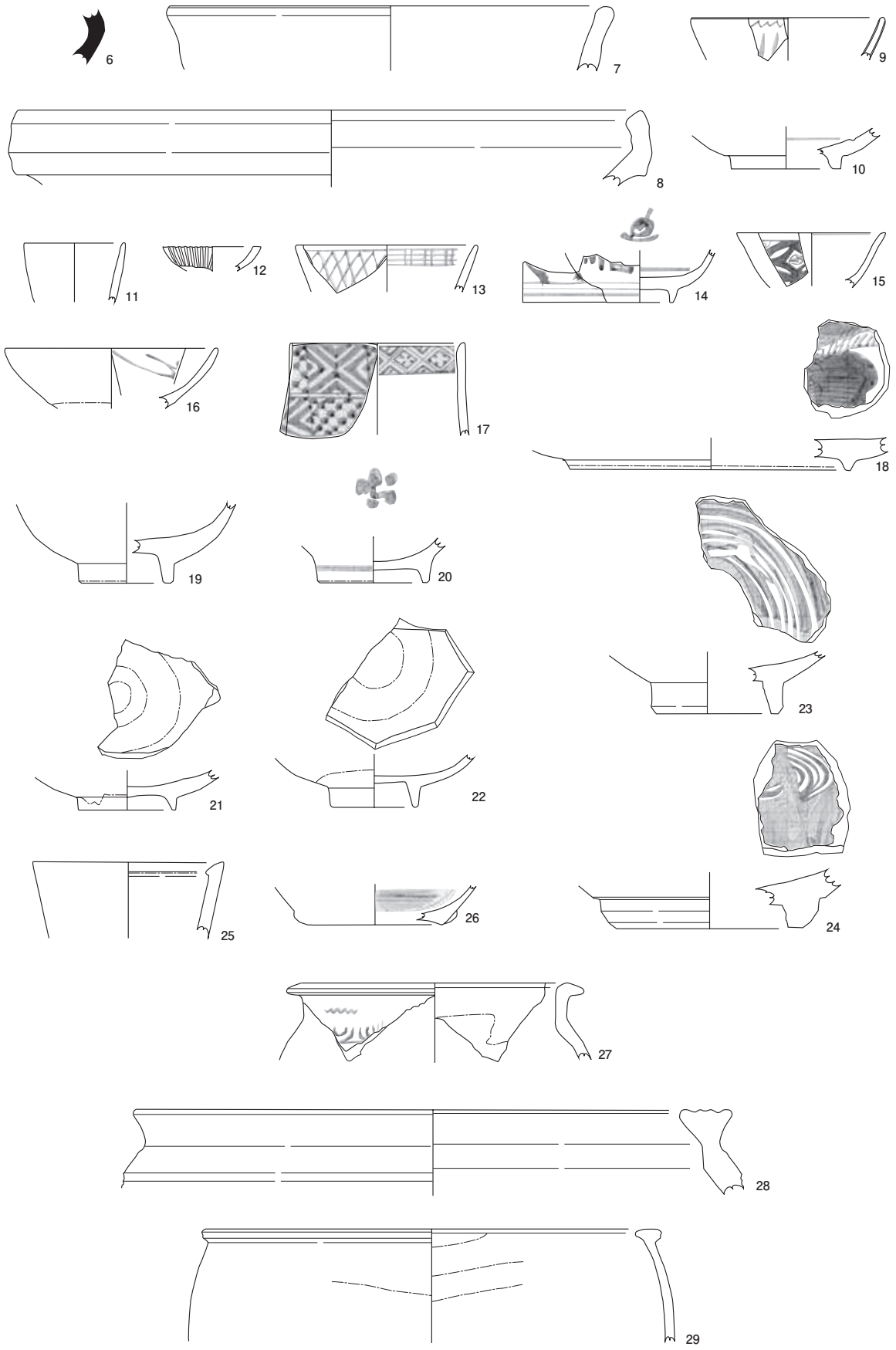


図 14 SK11・16 出土遺物実測図



0 10cm
(S=1/3)

图 15 SK17 出土遺物実測図

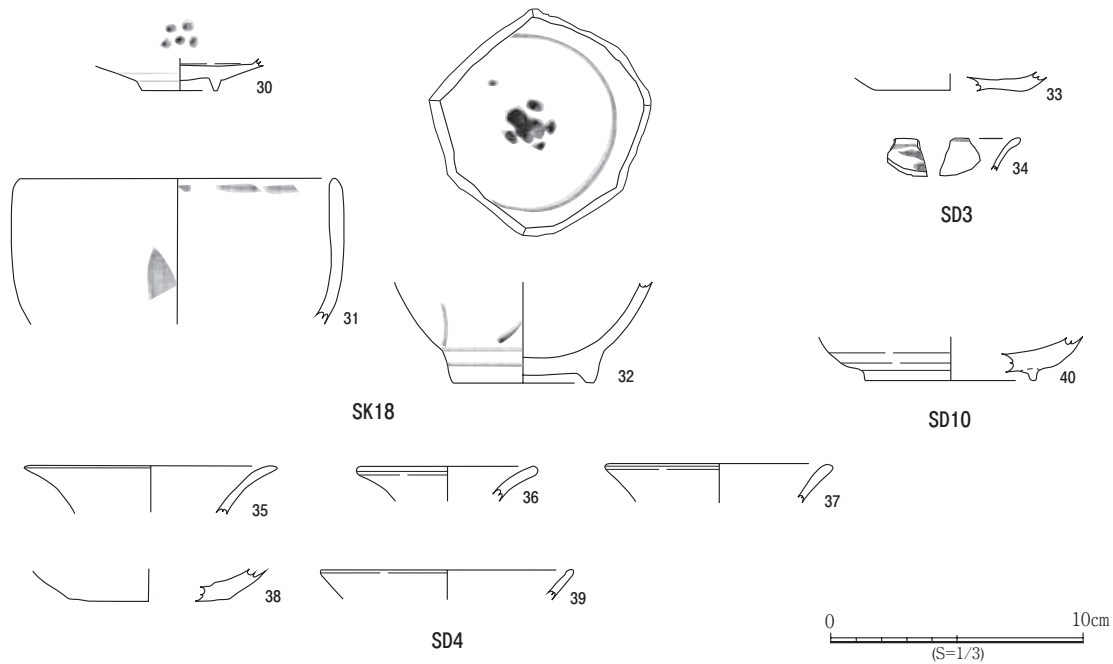


図 16 SK18, SD3・4・10 出土遺物実測図

遺構外出土遺物 (図 17)

今回の調査では、遺構外から弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器、土製品などが出土した。そのうち 26 点を図示した。出土位置ごとの内訳は 1 区から 10 点、2 区から 4 点、3 区から 11 点、4 区から 1 点である。

41～50 は 1 区出土遺物である。41・42 は弥生土器である。41 は甕口縁部である。頸部から口縁部にかけて大きく外反するように立ち上がる。42 は鉢である。43～46 は須恵器である。43 は杯蓋である。44・45 は高台付の杯底部である。8 世紀代のもと思われる。47～49 は土師質土器である。47 は杯口縁で、口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。48 は杯底部で切り離しは回転糸切りである。49 は高台付の椀底部である。50 は瓦器椀口縁である。

51～54 は 2 区出土遺物である。51 は土師器甕口縁である。52 は備前焼の播鉢で口縁をやや拡張している。53 は染付碗である。54 は土錘である。全長 4.8 cm、幅 1.3 cm、孔径 0.5 cm、重さ 8 g である。

55～65 は 3 区出土遺物である。55～59 は須恵器である。55 は杯蓋である。57・58 は杯底部である。いずれも切り離しは回転ヘラ切りで高台を貼り付けている。59 は杯である。口径 13.6 cm、底径 9 cm、器高 3.6 cm、ロクロ成形で平底を呈し、底部から口縁部に向かって直線的にたちあがる。下半部は酸化焰焼成で明赤褐色である。60 は土師質土器椀底部である。61 は青磁である。62 は青磁染付である。内面口縁部に四方櫛文がみられ、外面は無文で青磁釉を施す。肥前産のもと思われる。63・64 は備前焼の播鉢で同一個体の可能性がある。63 は口縁部で外面に凹線が二条巡り、内面に段がある。65 は土錘である。全長 3.8 cm、幅 1.7 cm、孔径 0.4 cm、重さ 10 g である。

66 は 4 区出土遺物である。須恵器の高台付杯底部である。

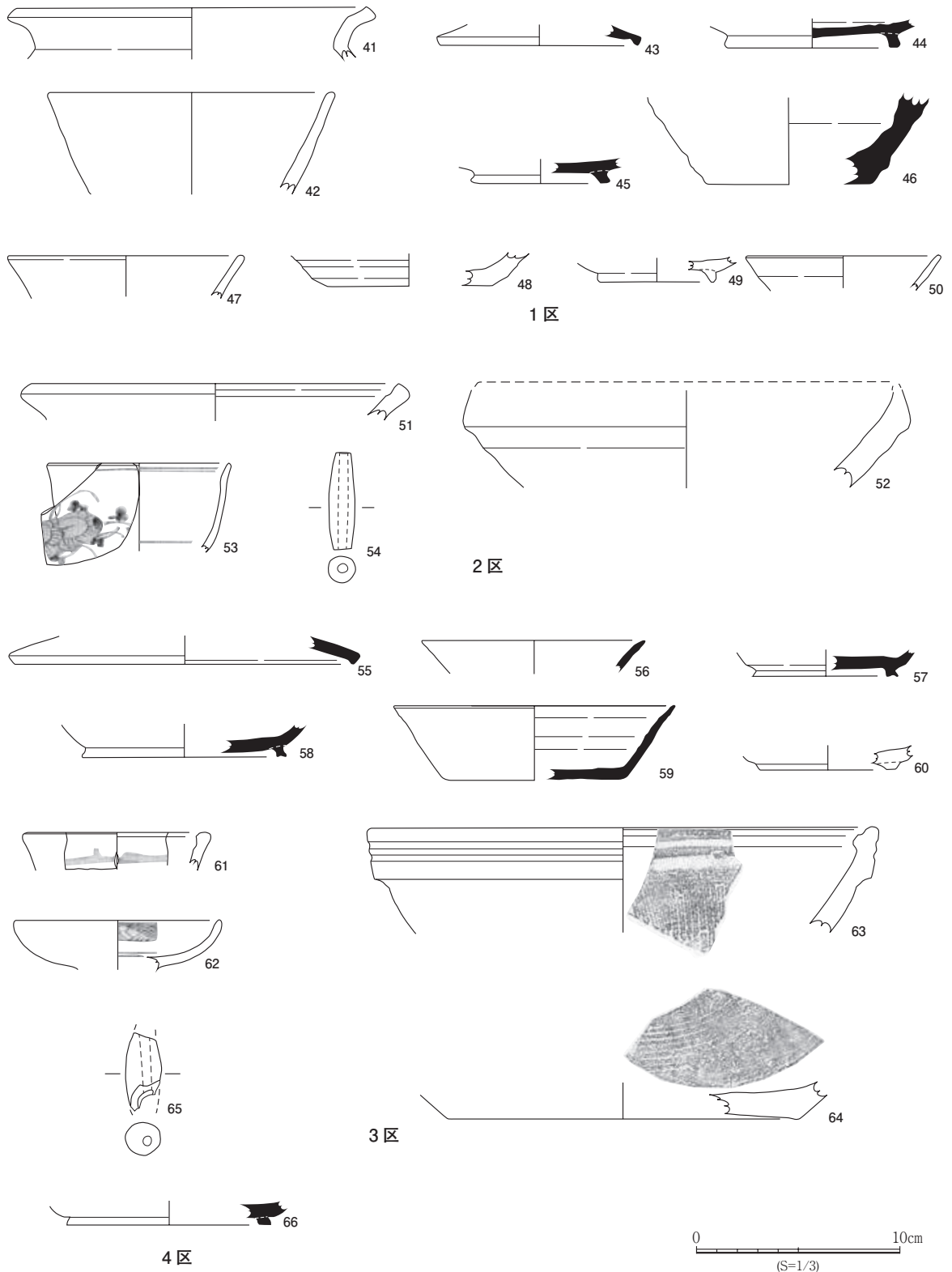


图 17 遺構外出土遺物実測図

第Ⅳ章 自然科学分析

前浜境遺跡土壌サンプルの自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、前浜境遺跡（高知県南国市所在）の段状遺構と思われる場所から採取した土壌試料2点を対象として、遺跡周辺の環境と人間活動の関係にかかる情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、植物珪酸体分析、種実分析、炭化材同定を実施する。

1. 試料

試料は、2区の段状遺構1から土壌試料2点が採取され、分析に供されている。試料はラベルに「土壌」「焼土」の区別があることから、この名称で報告する。この土壌2点を対象として、植物珪酸体分析、種実分析を実施する。また、種実分析で抽出された炭化材を対象として、放射性炭素年代測定、炭化材同定を実施する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理:AAA)。濃度はHCl、NaOH共に最大1mol/Lである。一方、試料が脆弱で1mol/Lでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度のNaOHの状態での処理を終える。その場合はAaAと記す。また、ごく微量(数mgを下回る)な試料は、年代測定に必要なグラファイト(1mg)が回収できない可能性があるため、最初の塩酸処理で止める(HClと記す)。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。

測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach, 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk, 2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer *et al.*, 2020) である。

(2) 植物珪酸体分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い (例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993)。本分析調査では、特に焼土面での珪化組織片の産状により、当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、植物珪酸体を含む珪化組織片を、近藤 (2010) の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土 1g あたりの植物珪酸体含量 (同定した数を乾土 1g あたりの個数に換算) を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個 /g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め (100 単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

(3) 種実分析

植物珪酸体分析に供した試料の残り全量を常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5 mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す (約 20 回)。残土を粒径 0.5 mm の篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料 (炭化物主体) と水に沈んだ試料 (砂礫主体) を、粒径別に常温乾燥させる。

水洗・乾燥後の炭化物主体試料・砂礫主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な炭化種実の他、主に 2 mm 以上の炭化材などの遺物をピンセットで抽出する。

炭化種実の同定は、現生標本や中山ほか (2010)、鈴木ほか (2018) 等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭化材は重量と最大径、炭化材主体、砂礫主体は重量を一覧表に併記する。

分析後は、炭化種実を分類群別に容器に入れて保管する。炭化材は、一部を放射性炭素年代測定および樹種同定に供する。その他の抽出物と残渣は容器に入れて保管する。

(4) 炭化材同定

段状遺構 1 の土壌から抽出された炭化材は、年代測定用にトリミングを行った残渣を用いて樹種同定を行う。焼土から抽出された炭化材は多数の細片で、炭化材同定は不能であった。

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3割断面を作成する。走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1、図18に示す。試料の測定年代（補正年代）は、段状遺構1の土壌より得られた炭化材（スギ）が 160 ± 20 yrBP、焼土より得られた炭化材片が 240 ± 25 yrBP の値を示す。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。暦年較正年代は、測定誤差を 2σ として計算させた結果、段状遺構1の土壌（スギ炭化材）が calAD 1,666 ~ 1,950+、焼土（炭化材）が calAD 1,530 ~ 1,800 である。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用	暦年較正年代				Code No.					
						年代値					確率				
段状遺構1 土壌	炭化材 (スギ)	AAA	160 ± 20	-25.16 ± 0.27	159 ± 20	σ	cal AD 1673	-	cal AD 1692	278	-	259	calBP 12.8	pal- 14368	YU- 16980
							cal AD 1728	-	cal AD 1777	223	-	173	calBP 31.4		
							cal AD 1798	-	cal AD 1809	152	-	141	calBP 7.6		
							cal AD 1920	-	cal AD 1943	30	-	7	calBP 16.5		
							cal AD 1666	-	cal AD 1699	284	-	252	calBP 16.4		
						2σ	cal AD 1722	-	cal AD 1784	229	-	167	calBP 35.6		
							cal AD 1795	-	cal AD 1815	155	-	136	calBP 9.9		
							cal AD 1835	-	cal AD 1884	115	-	66	calBP 12.1		
							cal AD 1910	-	cal AD 1950+	41	-	0	calBP 21.4		
							cal AD 1645	-	cal AD 1665	306	-	286	calBP 48.9		
段状遺構1 焼土	炭化材片 多数	HCl	240 ± 25	-26.84 ± 0.35	240 ± 23	σ	cal AD 1785	-	cal AD 1794	166	-	156	calBP 19.4	pal- 14369	YU- 16981
							cal AD 1530	-	cal AD 1539	421	-	412	calBP 1.2		
							cal AD 1635	-	cal AD 1677	315	-	274	calBP 61.6		
							cal AD 1742	-	cal AD 1751	208	-	199	calBP 1.2		
							cal AD 1764	-	cal AD 1800	186	-	150	calBP 31.4		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5,568 年を使用。
- 2) yrBP 年代値は、1950 年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) AAA は酸-アルカリ-酸処理、HCl は塩酸処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal4.4 を使用。
- 6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 7) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、 2σ は 95% である。

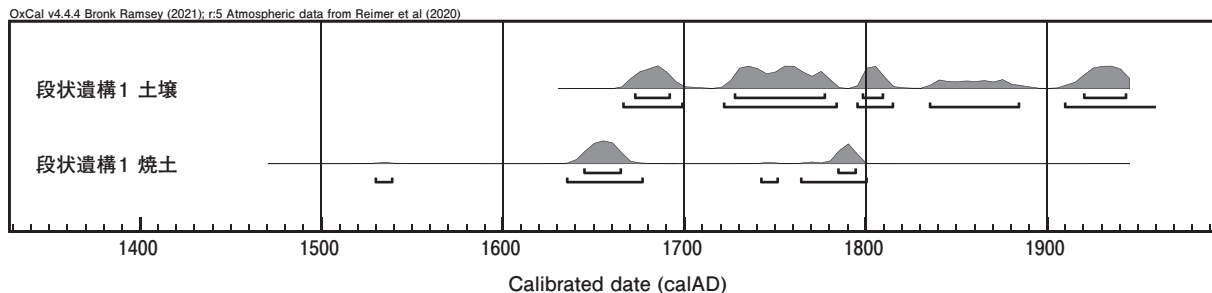


図18 暦年較正結果

(2) 植物珪酸体分析

結果を表2に示す。

段状遺構1の2点からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。また検出される分類群も少ない。

土壌では、珪化組織片が検出されない。また、植物珪酸体含量が少なく、栽培植物であるイネ属、タケ亜科、分類群が明確にならない不明が僅かに認められるに過ぎない。

焼土では、珪化組織片としてイネ属の穎珪酸体や葉部短細胞列が検出され、穎珪酸体が多い。埋土試料と同様な分類群が見られるが、タケ亜科機動細胞珪酸体の含量が多い。

各試料からイネ科起源（棒状珪酸体、長細胞起源、毛細胞起源）も検出されるが、分類群の特定には至らない（図19）。

(3) 種実分析

結果を表3に示す。また、炭化種実各分類群の写真を図20に示して同定根拠とする。

2試料512.5gを洗い出した結果、炭化種実は、栽培植物のイネの籾10個、草本のイネ科の果実1個の、計11個が同定された。1個は同定ができず、不明炭化物としている。その他、炭化材1.82g（最大1.7cm）、炭化材主体1.35g、砂礫主体23.58gが確認された。その他、炭化していないエノコログサ属Aの果実1個、エノコログサ属Bの果実2個、カヤツリグサ属の果実2個、タガラシの果実1個、キランソウ属の果実1個の、計7個が同定されたが、後代の混入と判断されるため、考察より除外する。以下、試料別状況を記す。

表2 植物珪酸体分析結果 (個/g)

分類群	段状遺構1	
	土壌	焼土
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ属	<100	200
タケ亜科	<100	100
不明	100	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ属	<100	<100
タケ亜科	100	1,100
不明	200	700
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	200	500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	400	1,800
植物珪酸体含量	600	2,300
珪化組織片		
イネ属穎珪酸体	-	**
イネ属短細胞列	-	*
イネ科起源（その他）		
棒状珪酸体	*	*
長細胞起源	-	*
毛細胞起源	*	-

1) 含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。

2) 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

3) <100:100個/g未満。

4) -:未検出、*:含有、**:多い。

表3 種実分析結果

分類群・部位・状態・粒径	段状遺構1		備考			
	土壌	焼土				
炭化種実						
イネ	籾(基部)	破片	炭化	-	3	(個)
	籾	破片	炭化	6	1	(個)
イネ科	果実	完形	炭化	-	1	(個)
不明炭化物				-	1	(個)
炭化材				16.98	5.99	最大径(mm)
	>4mm			0.78	-	乾重(g),一部樹種同定
	4-2mm			1.04	0.004	乾重(g)
炭化材主体	2-1mm			0.94	-	乾重(g)
	1-0.5mm			0.41	0.004	乾重(g)
砂礫主体	4-2mm			2.02	-	乾重(g)
	2-1mm			5.65	0.28	乾重(g)
	1-0.5mm			14.61	1.01	乾重(g)
非炭化種実						混入の可能性
エノコログサ属A	果実	完形		-	1	(個)
エノコログサ属B	果実	完形		-	1	(個)
		破片		-	1	(個)
カヤツリグサ属	果実	完形		2	-	(個)
タガラシ	果実	完形		1	-	(個)
キランソウ属	果実	破片		-	1	(個)
分析量				402.1	110.4	湿重(g)

- 段状遺構 1 土壌 (試料 402.1 g)

イネの炭化粉 6 個、炭化材 1.82 g (最大 1.7 cm)、炭化材主体 1.35 g、砂礫主体 22.29 g が検出された。

- 段状遺構 1 焼土 (試料 110.4 g)

イネの炭化粉 (基部) 3 個、炭化粉 1 個、イネ科の果実 1 個、不明炭化物 1 個、炭化材 0.004 g (最大 0.6 cm)、炭化材主体 0.004 g、砂礫主体 1.29 g が検出された。

炭化種実の保存状態は不良である。以下、各分類群の形態的特徴を記す。

- イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

粉 (内外穎) は炭化しており黒色。完形ならば長さ 6 ~ 7.5 mm、幅 3 ~ 4 mm、厚さ 2 ~ 3 mm 程度の偏平な長楕円体。基部に大きさ 1 mm 程度の斜切状円柱形の果実序柄 (小穂軸) と 1 対の護穎を有し、その上に外穎 (護穎と言う場合もある) と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲粉を構成する。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。出土粉は 10 個中 3 個が基部の小穂軸で、残存長 1.8 mm を測る。

- イネ科 (Gramineae)

果実は長さ 1.8 mm、幅 0.7 mm の半狭楕円体。背面は丸みがあり腹面は平らである。小型・細身であることから、雑穀類のヒエやアワ、キビとは区別され、野生種と考えられる。

(4) 炭化材同定

炭化材同定の結果、段状遺構 1 土壌より抽出された炭化材は針葉樹のスギである。以下に解剖学的特徴を示す。

- スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2 個が多い。放射組織は単列、1 ~ 10 細胞高。

4. 考察

(1) 遺構の年代観

2 区の段状遺構 1 の試料について放射性炭素年代測定を実施した結果、補正年代値は、土壌より得られた炭化材 (スギ) が 160 ± 20 yrBP、焼土より得られた炭化材が 240 ± 25 yrBP であった。炭化材が遺構埋積時あるいは焼土生成時のものであるなら、年代値は遺構機能時の年代を示している可能性がある。

(2) 人間活動と遺跡周辺の環境

2 区の段状遺構 1 から採取された土壌、焼土のいずれの試料からも、栽培植物のイネ属の植物珪酸体とイネの炭化粉が確認された。穀類のイネが近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆される。特に段状遺構 1 の焼土では、イネ属の穎珪酸体、短細胞列などの珪化組織片が検出されたことから、イネ属の穎珪酸体は炭化粉に由来した可能性があるいは粉が燃焼する過程で焼土に混入した可能性がある。この点は、粉の被熱が段状遺構 1 に混入する以前あるいは以後のどの時点かを把握する必要がある、発掘調査所見を含めて検討することが望まれる。なお、葉部の短細胞列も見られたことから、粉以外に葉部の混入も示唆され、稲藁も混

じっていた可能性が考えられる。

栽培植物のイネを除いた分類群は、タケ亜科珪酸体とイネ科炭化果実が確認され、調査区周辺に生育していたと考えられる。なお、イネ科果実は炭化していることから、何らかの理由で火を受けたとみなされる。

一方、土壌、焼土の2試料から抽出された炭化材の内、同定可能なものは1点のみであり、常緑針葉樹のスギに同定された。スギは水に強く、割裂性が良くて曲げに強い。また大径木が得られる良材であることから、建築材や器具材などさまざまな用途に使われる。高知県のような高温多湿な地域ではスギの生育に適しており、天然のスギ林が存在し、そこから木材を得ていたと思われる。

引用文献

Bronk, R. C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.

林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.

伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

近藤錬三, 1982, Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書, 32p.

近藤錬三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.

パリオ・サーヴェイ株式会社, 1993, 自然科学分析からみた人々の生活(1). 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, 慶應義塾, 347-370.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62,1-33.

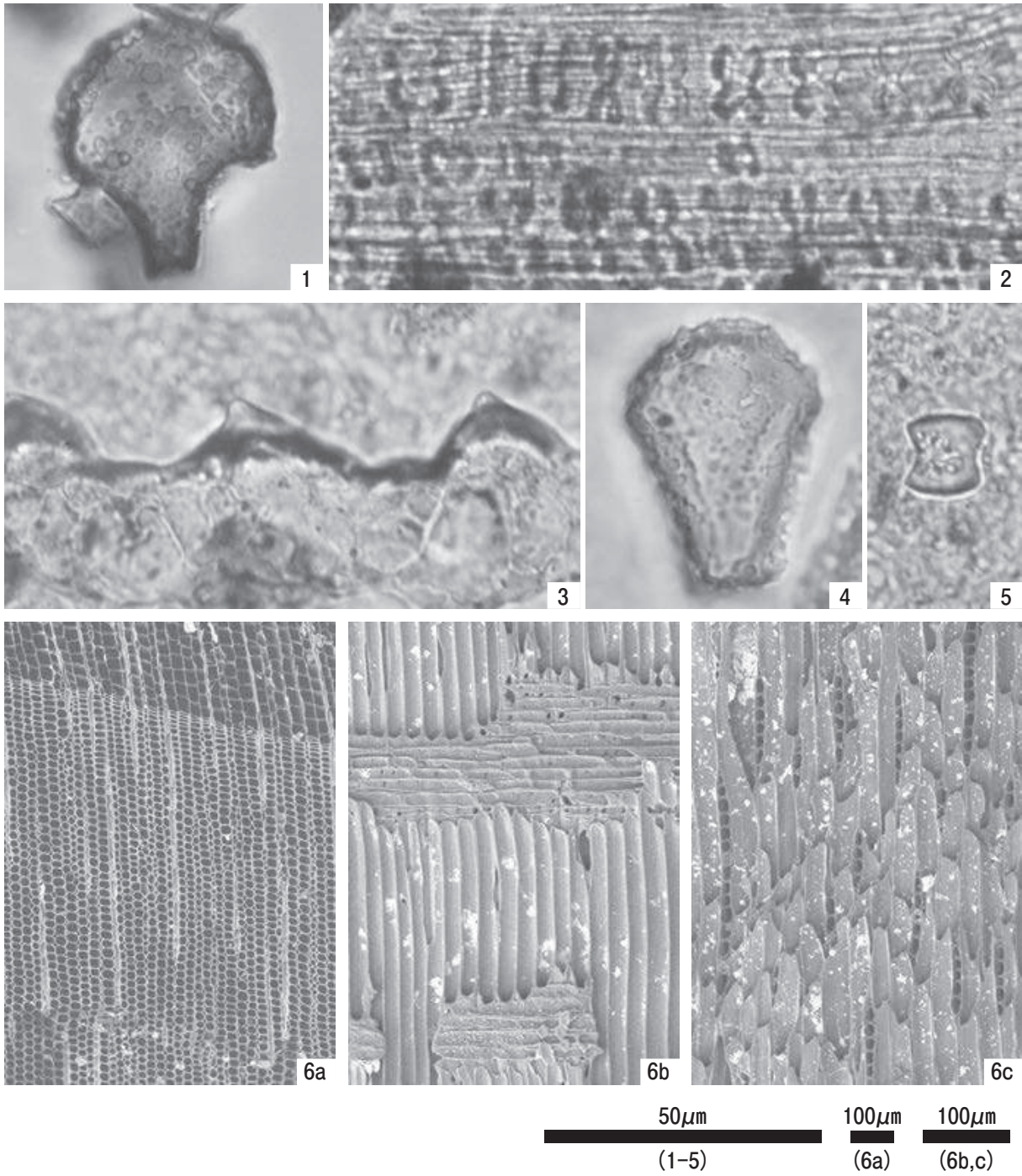
Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of ¹⁴C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.

杉山真二・藤原宏志, 1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-. *考古学と自然科学*, 19, 69-84.

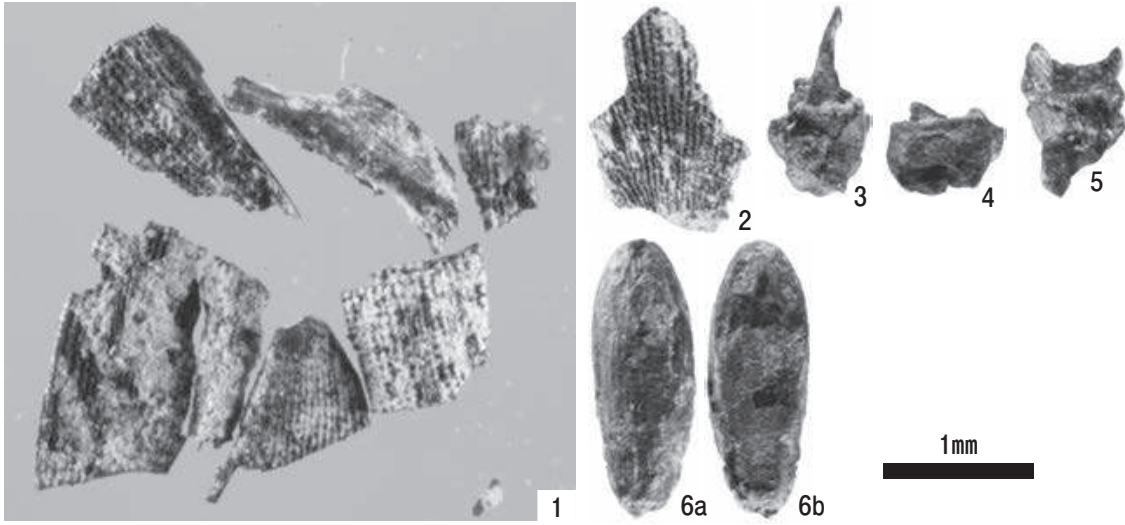
鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂-. *ネイチャーウォッチングガイドブック*, 誠文堂新光社, 303p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



- 1. イネ属機動細胞珪酸体 (段状遺構1; 土壤)
- 2. イネ属短細胞列 (段状遺構1; 焼土)
- 3. イネ属穎珪酸体 (段状遺構1; 焼土)
- 4. タケ亜科機動細胞珪酸体 (段状遺構1; 焼土)
- 5. タケ亜科短細胞珪酸体 (段状遺構1; 焼土)
- 6. スギ (段状遺構1; 土壤 a: 木口, b: 柁目, c: 板目)

図 19 植物珪酸体・炭化材の顕微鏡写真



1.イネ 籾 (段状遺構1;土壌)

3.イネ 籾 (基部) (段状遺構1;焼土)

5.イネ 籾 (基部) (段状遺構1;焼土)

2.イネ 籾 (段状遺構1;焼土)

4.イネ 籾 (基部) (段状遺構1;焼土)

6.イネ科 果実 (段状遺構1;焼土)

図 20 炭化種実写真

第V章 総括

今回の調査区からは掘立柱建物跡1棟、土坑11基、溝状遺構8条、段状遺構2カ所、ピット列などを検出した。検出された遺構の多くは浅いものが多かった。以下に簡単ではあるが、各遺構と遺物についてまとめる。

1. 遺構

遺構は時期不明のものを除くと、中世もしくは近世に属すると考えられる。以下に時期ごとに記述する。

○中世

2区のSD7と4区のSD10は位置関係から同一遺構の可能性はある。南部が西方向に湾曲しており、その全容を明らかにすることはできなかった。SD7からは全く遺物が出土しなかったが、SD10から内黒の黒色土器や輪高台椀などが出土している。4区SK12を切り、SK11に切られていることから、SK12とともに今回の調査の中で最も古い遺構の一つである。

4区のSK11は明橙色の粘土がブロック状に混ざる埋土を擁しており、底面外周には幅14cm程度の周溝が巡っている。掘方が円形を呈すこの土坑は埋め桶土坑で、底部の周溝は水や肥料などを溜める事を目的として据え置かれた桶の跡の可能性もある。須恵器杯蓋が出土しているが、土師器羽釜や瓦質土器などを含んでおり、当該期に帰属する遺構と考えられる。

3区のSD3とSD4は埋土の堆積状況から切り合い関係こそあるものの、同色の埋土や同時期の遺物を擁していることから、近い時期に埋没したものと思われる。出土遺物の傾向からこちらも中世に属すると考える。

○近世

4区の南半部から検出されたSK13、SD14、SK16～21はいずれも灰白色砂で埋没しており、近い時期に埋没した遺構群と考えられる。SK17・18は大規模な掘方を持ち、掘り込みも60cm程度ある。調査区内には砂の堆積がなく、周辺で砂が堆積するのは南に横たわる浜堤部であるため、南から運ばれてきた砂により埋没したと考えるのが自然である。このような堆積状況から、津波などにより埋没した遺構群の可能性はある。出土遺物は陶磁器を主として、土師質土器や須恵器の細片、瓦片などを含む。出土遺物から19世紀頃までの廃棄土坑と考えられる。

2区中央には、削り出しにより平坦面を構築した段状遺構を2基検出した。段状遺構1の埋土には炭を多量に含む層があり、床面には焼土面も形成されており、火を使う作業場として構築されたとみられる。遺物がほとんど含まれていなかったが、自然科学分析の結果は18世紀頃の年代を示しており、遺構埋没後に同じ層で覆われていることから鑑みて、いずれも近世の遺構と考えられる。

2. 遺物

今回の調査では、弥生時代、古代、中世、近世の遺物が出土した。

包含層等から出土した遺物は弥生土器や須恵器片を一定量確認することができた。特に須恵器は蓋や杯など8世紀頃のもの各調査区から出土している。また、土師質土器や青磁碗、備前焼播鉢など中世に属する遺物も散在している。

調査全体を通して主体を占めるのは、近世の陶磁器である。その多くは産地の特定は難しいものの、判別できる範囲では尾戸焼や能茶山焼といった在地産や瀬戸美濃、肥前、備前などの製品がある。器種としては碗や皿、鉢、播鉢、紅皿、火鉢、甕といった各種日用雑器類が揃っている。主に18世紀から19世紀頃に属する。

3. まとめ

今回の調査を通じて、下島地区の様相の一端が明らかとなった。

物部川対岸には、深淵遺跡や下ノ坪遺跡、高田遺跡など古期扇状地上に古代の官衙関連遺跡が多く分布している。近年、それより低い新期扇状地でも東狭間遺跡で古代の掘立柱建物跡が見つまっている。前浜境遺跡の所在する物部川右岸では、田村遺跡群で古代のコの字配置の掘立柱建物群が知られているが、当遺跡も古代の須恵器が一定量散布している状況から、周辺に該期の遺構が存在する可能性が高まった。近隣には、『土佐日記』に登場する大湊の有力推定地もあり、古代を通じた川湊を臨む遺跡群の様相に新たな一面が明らかとなったといえる。

また、南国市海岸部に発達している浜堤上は中世末には屋敷が建ち並ぶ景観であったことが歴史地理学の研究（片岡健・高橋誠一 1999）等により知られているが、その周辺域である河口部における中世から近世にかけての集落の一端を明らかにすることができたことも大きな成果である。

参考文献

廣田佳久『西野々遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011年

久家隆芳『田村西遺跡』（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2013年

坂本裕一・油利崇『西野々遺跡』南国市教育委員会 2014年

宮地啓介『東狭間遺跡』香南市教育委員会 2019

片岡健・高橋誠一「土佐国香長平野臨海部における天正期の集落形態—高知県南国市浜改田の事例—」

『史泉』第90号 1999年

表4 出土遺物観察表

図面 番号	遺物 番号	調査区	遺構名・ 取上位置	種別	器種・ 部位	口径	器高	底径	特徴・調整	胎土	備考
図14	1	4区	SK11	須恵器	杯蓋	10.4	(1.0)		内外面摩耗	細粒砂含む	
図14	2	4区	SK11	須恵器	杯蓋	11.4	(1.5)		内外面回転ナデ	細粒砂若干含む	
図14	3	4区	SK11	土師器	羽釜	24.6	(3.2)		口縁部断面は三角形を呈す、摩耗著しい	砂粒多く含む	
図14	4	4区	SK16	陶器	鉢		(2.7)	9.2	平底無釉、回転糸切り	緻密	
図14	5	4区	SK16	染付	碗	13.6	(5.5)		端反碗、口唇部呉須口紅、外面蜻唐草に下界線、内面草花文、見込二圏線	細粒砂若干含む	
図15	6	4区	SK17	須恵器	壺肩部		(2.7)		外面摩耗、内面回転ナデ	細粒砂含む	
図15	7	4区	SK17	土師器	甕	22.6	(3.3)		内外面摩耗	砂粒多く含む	
図15	8	4区	SK17	陶器	播鉢	32.0	(3.8)		口唇内傾し段を持つ、外面露胎し口縁退化した凹線、内面暗赤褐化粧土、回転ナデ	砂粒含む	備前焼 V A 期、16 c 前半
図15	9	4区	SK17	青磁	碗	9.8	(2.2)		外面細連弁文	緻密	
図15	10	4区	SK17	青磁	碗		(2.1)	5.6	外面露胎、内面割花文	砂粒若干含む	同安窯
図15	11	4区	SK17	白磁	猪口	5.2	(3.0)			緻密	
図15	12	4区	SK17	白磁	紅皿	5.0	(1.3)		外面貝殻様、型打、口唇部は平坦、内外面共に白濁釉	緻密	
図15	13	4区	SK17	染付	鉢	9.2	(2.4)		外面網目文、内面格子文	緻密	肥前系、18 c 後半～19 c
図15	14	4区	SK17	染付	小碗		(2.7)	3.4	外面高台脇界線、高台二圏線、内面見込二圏線と渦「福」	緻密	19 c
図15	15	4区	SK17	染付	小碗	7.6	(2.9)		外面に朱・墨の上絵付、内面に朱の上絵付	緻密	
図15	16	4区	SK17	磁器	小杯	10.8	(3.1)		外面底部無釉、内面文様あり	緻密	
図15	17	4区	SK17	染付	そば猪口	8.8	(4.7)		外面に区画された四方襷文、内面口縁部に四方襷文	緻密	
図15	18	4区	SK17	染付	大皿		(1.7)	14.4	壘付釉剥、内面見込に草花文	緻密	19 c
図15	19	4区	SK17	陶器	碗		(4.1)	4.8	壘付釉剥、高台内に線刻?	緻密	尾戸焼
図15	20	4区	SK17	陶器	碗		(2.2)	5.8	高台に圏線、壘付釉剥、見込に五弁花	緻密	瀬戸焼?
図15	21	4区	SK17	陶器	碗		(2.1)	5.0	高台周り無釉、見込を蛇ノ目釉剥ぎ	緻密	
図15	22	4区	SK17	陶器	碗		(2.7)	4.4	高台周り無釉、見込を蛇ノ目釉剥ぎ	緻密	
図15	23	4区	SK17	陶器	鉢		(3.2)	6.2	高台周り無釉、内面巻刷毛目文	緻密	
図15	24	4区	SK17	陶器	鉢		(3.0)	9.6	外面無釉、内面刷毛目文	砂粒若干含む	肥前
図15	25	4区	SK17	陶器	鉢	9.8	(3.9)		口唇部～外面に灰釉、内面は無釉	粗粒砂含む	
図15	26	4区	SK17	陶器	土瓶		(2.0)	7.0	貼付脚、底部は浅く凹む、外面露胎で全面煤けタール付着、内面施釉	緻密	
図15	27	4区	SK17	陶器	火鉢	15.3	(3.9)		内面口縁部～外面施釉、頸部と肩部分に線刻	緻密	瀬戸焼
図15	28	4区	SK17	陶器	甕	30.6	(4.3)		外面施釉	砂粒多く含む	
図15	29	4区	SK17	陶器	甕	23.2	(5.7)		内外面施釉	緻密	
図16	30	4区	SK18	染付	小碗		(1.2)	3.0	内面五弁花、外面高台脇に一圏線、外面高台に一圏線	緻密	
図16	31	4区	SK18	陶器	碗	12.6	(5.8)		筒形碗	緻密	尾戸焼
図16	32	4区	SK18	陶器	碗		(4.0)	5.6	内面見込に一圏線と五弁花、外面高台に二圏線	緻密	瀬戸焼、18 c 後半頃

図面 番号	遺物 番号	調査区	遺構名・ 取上位置	種別	器種・ 部位	口径	器高	底径	特徴・調整	胎土	備考
図16	33	3区	SD3	土師質土器	杯		(0.8)	6.0	内外面摩耗、底部回転糸切り	細粒砂含む	
図16	34	3区	SD3	染付	小杯		(1.3)		端反、外面圏線・草花文、内面圏線	緻密	
図16	35	3区	SD4	土師質土器	小杯	10.0	(1.8)		端反、内外面摩耗	細粒砂若干含む	
図16	36	3区	SD4	土師質土器	小皿	7.2	(1.4)		端反、内外面摩耗	細粒砂若干含む	
図16	37	3区	SD4	土師質土器	杯	9.0	(1.5)		端反、内外面摩耗	細粒砂若干含む	
図16	38	3区	SD4	土師質土器	杯		(1.3)	6.2	内外面摩耗	細粒砂若干含む	
図16	39	3区	SD4	瓦器	椀	10.0	(1.2)		内外面摩耗	細粒砂若干含む	
図16	40	4区	SD10	土師質土器	椀		(1.7)	6.8	内外面回転ナデ	細粒砂含む	
図17	41	1区	表土	弥生土器	甕	17.2	(2.5)		内外面摩耗	粗粒砂多く含む	
図17	42	1区	検面	弥生土器	鉢	14.0	(5.0)		内外面摩耗	粗粒砂多く含む	
図17	43	1区	表土	須恵器	蓋	9.6	(1.0)		内外面回転ナデ	細粒砂含む	
図17	44	1区	表土	須恵器	杯		(1.4)	8.6	内外面回転ナデ、外底中央に回転ヘラ切痕残す	細粒砂若干含む	8 c
図17	45	1区	表土	須恵器	杯		(1.2)	6.6	高台貼付痕顕著、外面回転ナデ、内面ナデ	細粒砂含む	8 c
図17	46	1区	表土	須恵器	甕		(4.6)	(8.2)	内外面回転ナデ	細粒砂含む	
図17	47	1区	検面	土師質土器	杯	11.4	(2.1)		内外面摩耗	細粒砂若干含む	
図17	48	1区	検面	土師質土器	杯		(1.6)	8.0	底部回転糸切り、内外面回転ナデ、摩耗	細粒砂含む	
図17	49	1区	表土	土師質土器	椀		(1.2)	5.6	高台貼付痕顕著、内外面摩耗	細粒砂含む	
図17	50	1区	表土	瓦器	椀	9.4	(1.6)		内外面摩耗	細粒砂若干含む	
図17	51	2区	検面	土師器	甕	18.0	(1.7)		口縁部内面強いナデにより凹む	粗粒砂多く含む	
図17	52	2区	表土	陶器	播鉢	(20.6)	(5.2)		内面に播目がわずかに残る	砂粒含む	備前焼Ⅳ A 期
図17	53	2区	表土	染付	碗	8.8	(4.3)		外面口縁部圏線と胴部草花文、内面口縁部二圏線、見込に圏線	緻密	肥前系
図17	54	2区	表土	土製品	土錘				全長 4.8 cm、全幅 1.3 cm、孔径 0.5 cm、重量 8 g	細粒砂若干含む	
図17	55	3区	表土	須恵器	杯蓋	16.5	(1.4)		内外面ナデ	細粒砂含む	
図17	56	3区	3層	須恵器	杯	10.8	(1.6)		内外面摩耗	細粒砂含む	
図17	57	3区	2層	須恵器	杯		(1.3)	7.0	内外面回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ	砂粒若干含む	杯A、8 c
図17	58	3区	3層	須恵器	杯		(1.6)	10.0	内外面回転ナデ、底部ヘラ切後ナデ、平行圧痕残る	細粒砂含む	
図17	59	3区	3層	須恵器	杯	13.6	3.6	9.0	丁寧な回転ナデ、胴下半部～底部は酸化焰焼成	細粒砂含む	
図17	60	3区	検面	土師質土器	椀		(1.2)	6.8	内外面摩耗	細粒砂若干含む	
図17	61	3区	2層	青磁	鉢	9.0	(1.8)		内面胴部褐釉	細粒砂若干含む	
図17	62	3区	2層	青磁染付	皿	10.0	(2.4)		外面青磁釉、内面口縁部に四方禪文、見込に二圏線の染付	緻密	肥前
図17	63	3区	2層	陶器	播鉢	24.6	(5.1)		口縁部外面 2 条の凹線、内面 8 条単位の播目	粗粒砂含む	備前焼
図17	64	3区	2層	陶器	播鉢		(1.8)	17.0	見込端から播目、内底摩耗	粗粒砂含む	備前焼
図17	65	3区	表土	土製品	土錘				全長 3.8 cm、全幅 1.7 cm、孔径 0.4 cm、重量 10.0 g	砂粒多く含む	
図17	66	4区	2・3層	須恵器	杯		(1.2)	10.0	内外面回転ナデ	細粒砂若干含む	

写真図版

図版1



調査地遠景（南東から）



調査地遠景（北西から）



遺構完掘状況オルソ画像（上空から）

図版3



1区 完掘状況（南東から）



2区 完掘状況（南から）



2区 東壁土層堆積状況（南西から）



3区 完掘状況（南東から）

図版5



4区 南部検出状況（南から）



4区 南部完掘状況（南から）



4区 北部検出状況（北西から）



4区 北部完掘状況（北西から）

図版7



5区 完掘状況（南から）



3区 SB1 完掘状況（北西から）



3区 SK6 土層堆積状況 (南から)



3区 SK6 完掘状況 (北から)



4区 SD10・SK12 土層堆積状況 (南から)



4区 SK13 完掘状況 (北東から)



4区 SK15 完掘状況 (西から)



4区 SK16 完掘状況 (東から)



5区 SK19 完掘状況 (東から)



5区 SK20 完掘状況 (東から)

図版9



4区 SK17・18 完掘状況（北東から）



5区 SK21 土層堆積状況（南から）



5区 SK21 完掘状況（東から）



3区 SD2 完掘状況（東から）



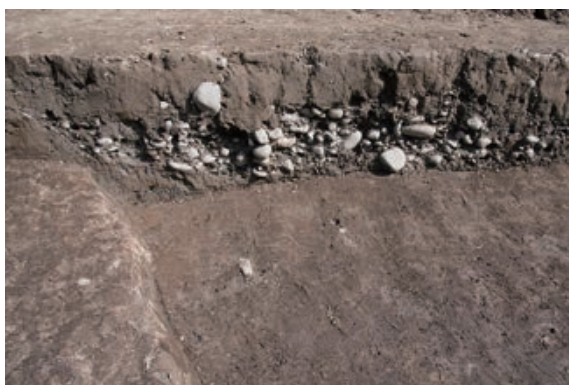
3区 SD4 完掘状況（北東から）



4区 SD10・SK11 土層堆積状況（東から）



4区 SD14 完掘状況（東から）



2区 段状遺構1 土層堆積状況（西から）



2区 段状遺構1 完掘状況（東から）



2区 段状遺構1 焼土面検出状況（東から）



2区 段状遺構2 完掘状況（西から）



2区 P7～12 土層堆積状況（南東から）



2区 P7～12 完掘状況（東から）

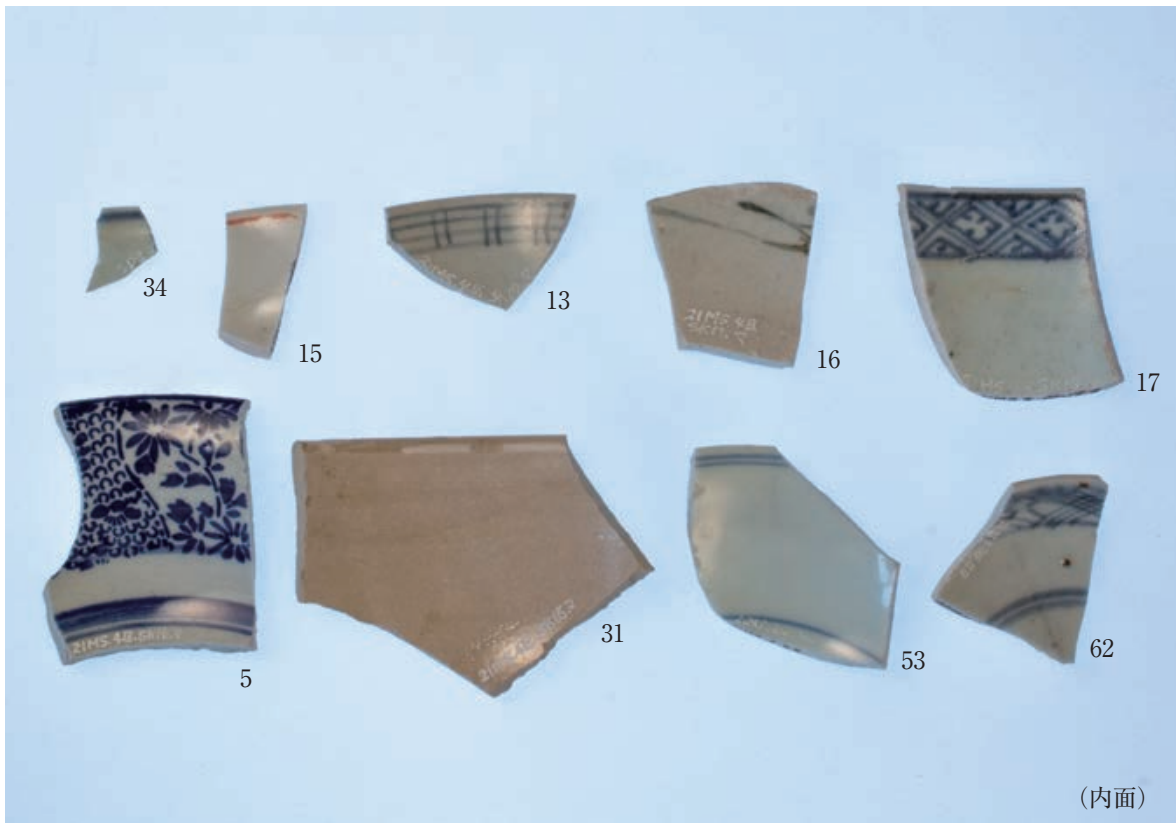
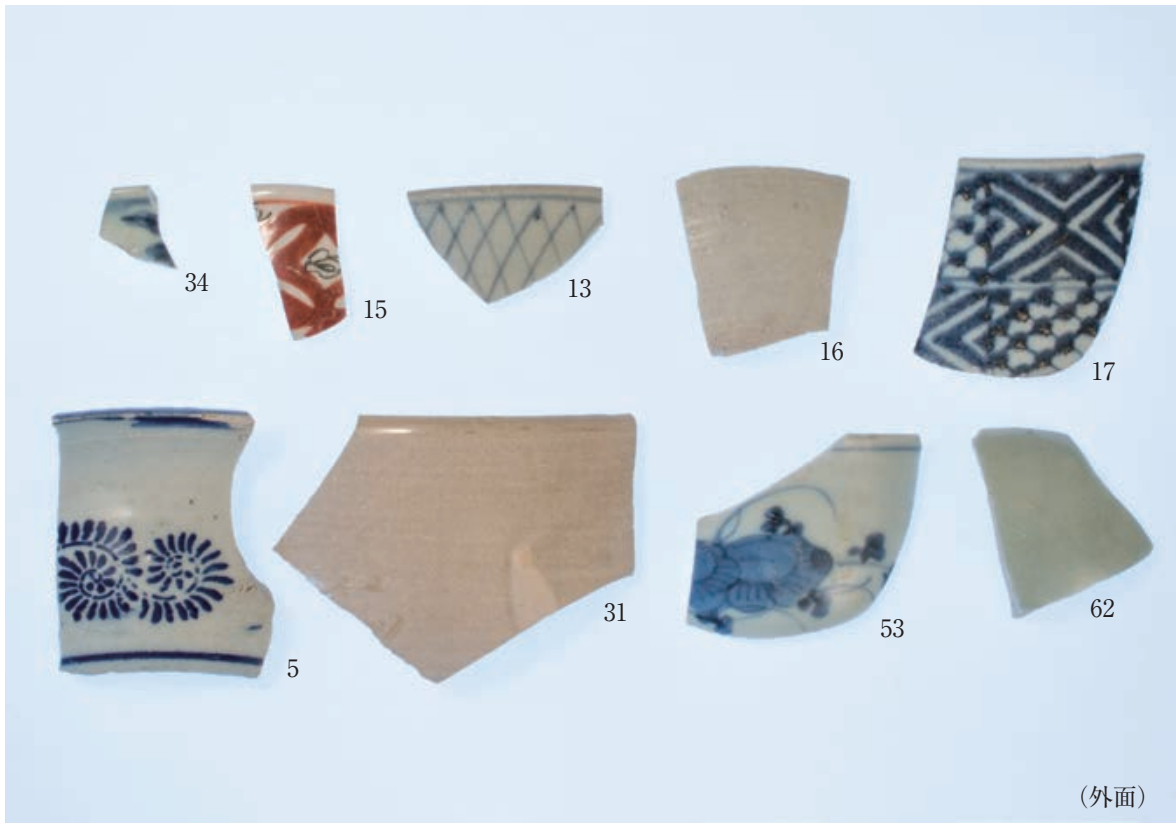


出土遺物 (1)

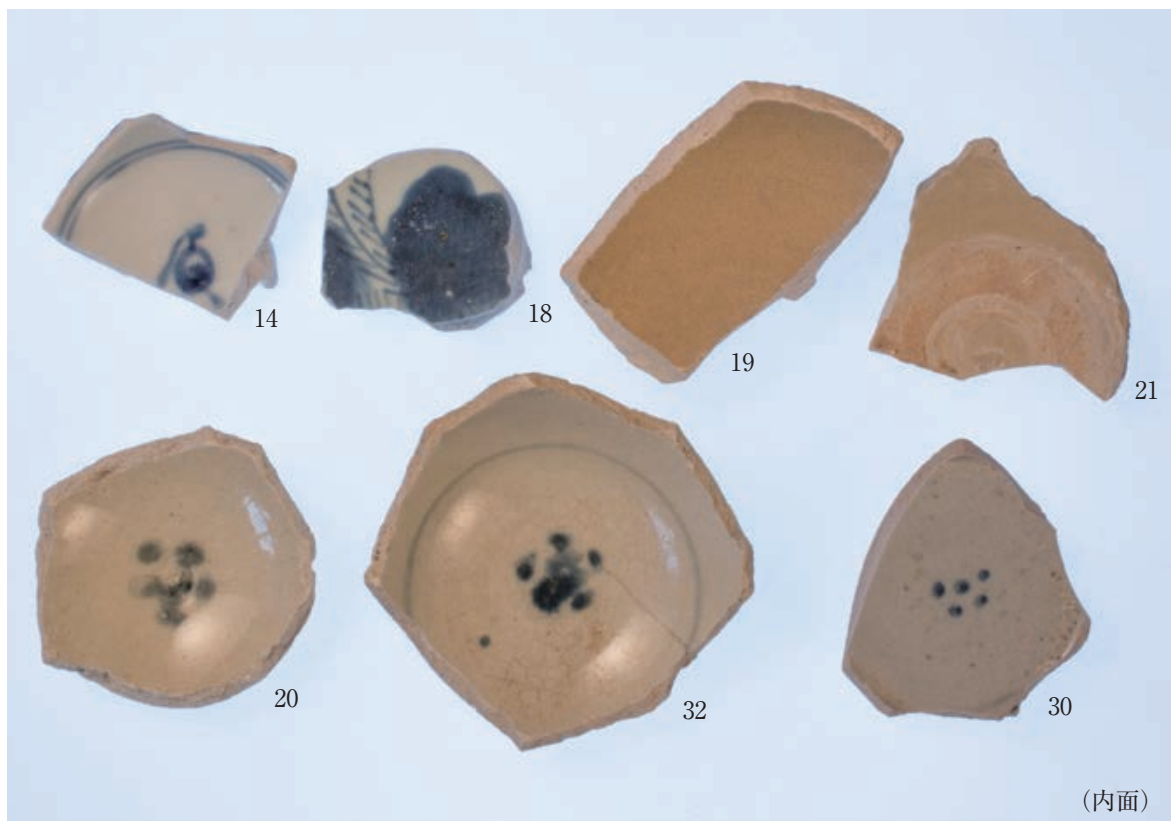
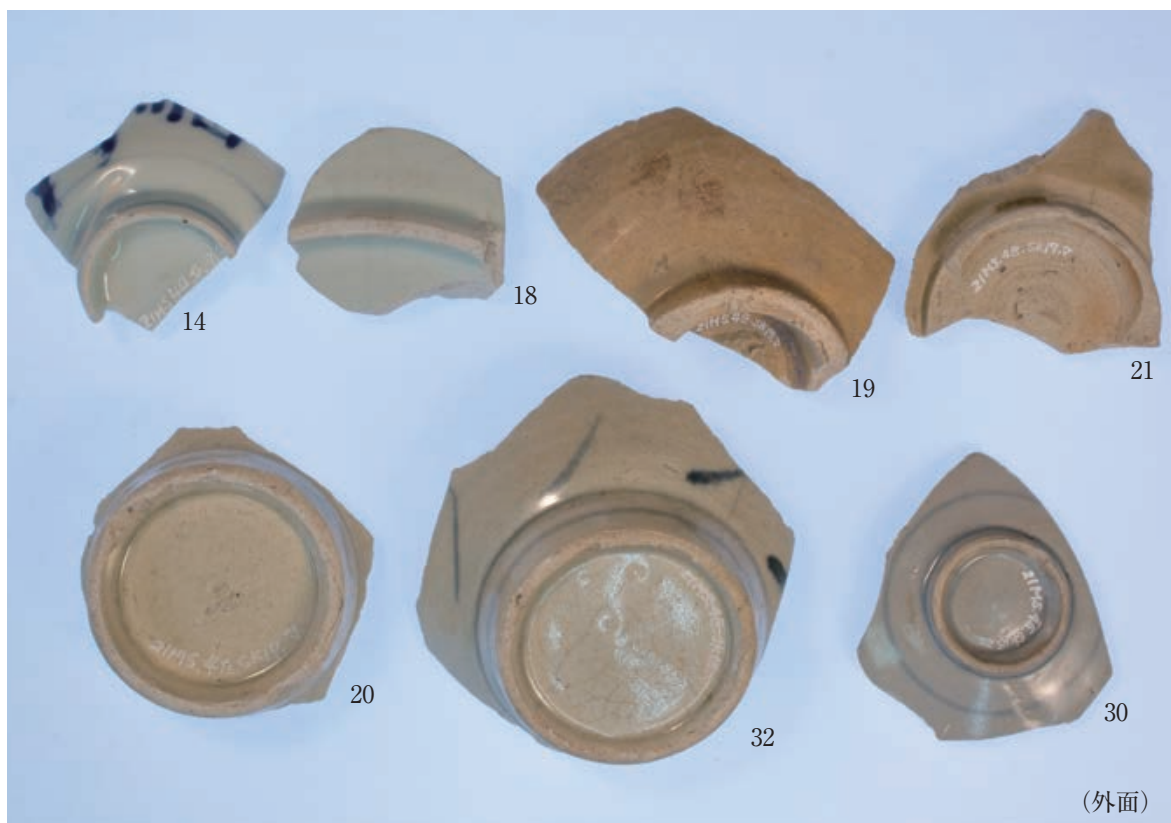


出土遺物 (2)

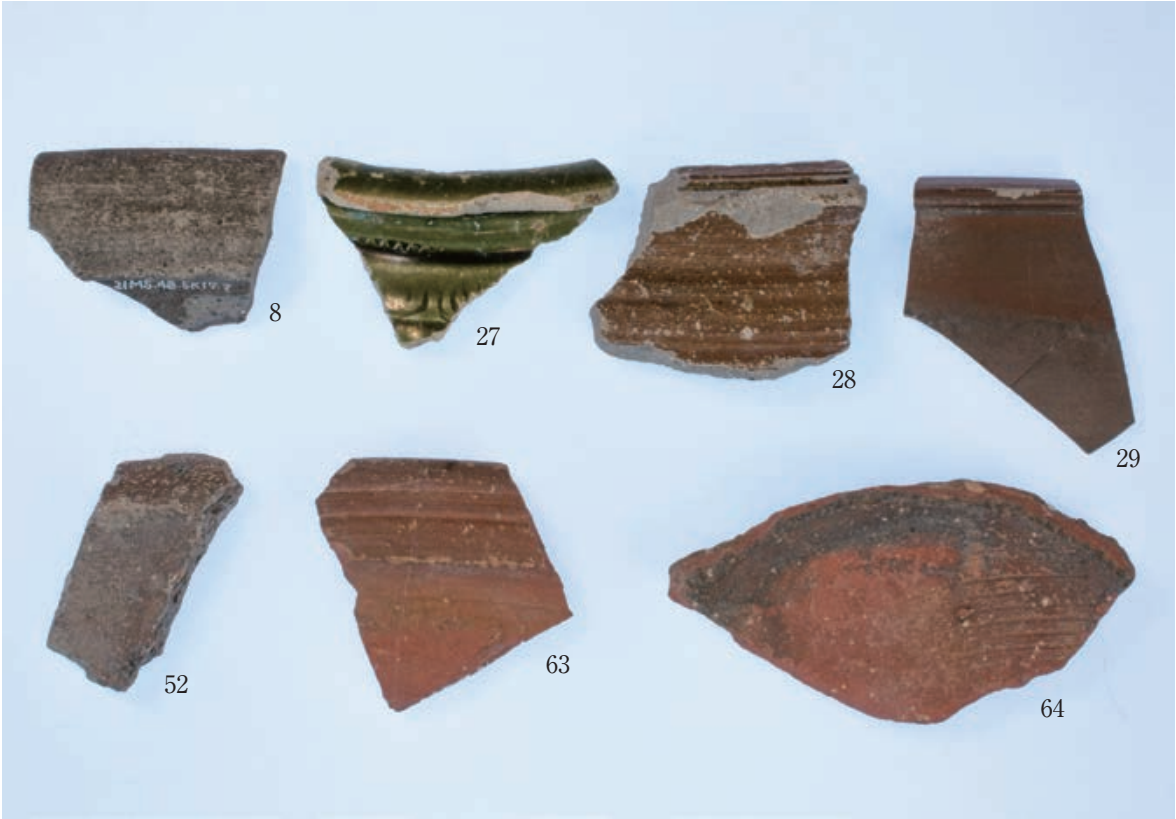
图版13



出土遺物 (3)



出土遺物 (4)



報告書抄録

ふりがな	まえはまさかいいせき							
書名	前浜境遺跡							
副書名	高知南国農地整備事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	南国市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	田上 修造							
編集機関	南国市教育委員会							
所在地	〒783-8501 高知県南国市大埞甲2301 TEL 088-880-6569							
発行年月日	2023年11月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
まえはまさかい 前浜境 いせき 遺跡	こうちけん 高知県 なんこくし 南国市 しもじま 下島 まえはまさかい 前浜境	39204	040299	33° 32' 19"	133° 40' 02"	2021.10.1 ～ 2021.10.29	320 m ²	高知南国 農地整備 事業に伴 う発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
前浜境 遺跡	散布地	弥生 古代 中世 近世	掘立柱建物跡 土坑 溝状遺構 段状遺構 ピット列	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 陶磁器 瓦				
要約	前浜境遺跡は物部川支流の秋田川右岸に立地する古代～中世の散布地である。今回の調査では、主に近世の遺構および弥生・古代・中世・近世の遺物を確認した。特に古代の須恵器が一定量含まれており、物部川右岸下流域における古代遺跡の分布に新たな資料を得ることができた。							

前浜境遺跡

(南国市埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集)

2023年11月30日発行

発行 高知県南国市教育委員会
高知県南国市大樋甲 2301
電話 (088) 880-6569

印刷 西村謄写堂